

原著論文

アメリカの学部学生用図書館のサービスと概念の変遷： 1990年代以降の変化を中心に

Trends in Services and Concepts in Undergraduate Libraries in the US since the 1990s

新見 槇子
Makiko NIIMI

Résumé

Purpose: This paper reviews historical changes and trends in undergraduate libraries in the US since the 1990s, focusing on the contents of services provided, and examines how the concept of ‘undergraduate library service’ has changed in the US.

Methods: First, through an extensive review of the literature, important discussions or assertions on changes in undergraduate libraries are systematically enumerated. Second, 23 universities having their own undergraduate libraries in 2009 were selected, and their services were surveyed by examining their websites and documents published about the undergraduate libraries. Third, a detailed case study was performed for four universities in which the undergraduate library had drastically changed and two universities that introduced a new undergraduate library in the 1990s.

Results: The results show that the services of undergraduate libraries have: 1) become more integrated, 2) played a greater role in university education, and 3) become more sensitive to students’ achievements. Also, library operations for the services have: 1) become more collaborative within the library system, and concurrently 2) become more collaborative with faculty members and campus’s units. On the other hand, the concept of undergraduate library services has changed from “services within libraries exclusively used by undergraduate students in research universities” to “services for undergraduate students provided totally by the whole library system”. More recently, services have become recognized as an important activity to be executed by the whole university, not only the library, through effective collaboration among departments involved in the education of undergraduate students.

新見槇子：慶應義塾大学大学院文学研究科図書館・情報学専攻

Makiko NIIMI: Graduate School of Library and Information Science, Keio University

e-mail: niimi@z7.keio.jp

受付日：2011年6月7日 改訂稿受付日：2011年8月24日 受理日：2011年10月13日

アメリカの学部学生用図書館のサービスと概念の変遷：1990年代以降の変化を中心に

- I. アメリカにおける学部学生を対象とする大学図書館のサービス
 - A. アメリカの動向に対する日本における注目
 - B. 学部学生用図書館への着目と本研究の目的
- II. 学部学生用図書館の概要
 - A. 定義
 - B. 歴史
 - C. 1990年代以降における変化の指摘
 - D. 変化の検討
- III. 1990年代以降の学部学生用図書館に関する調査の対象と方法
 - A. 調査対象
 - B. 調査方法
- IV. 1990年代以降の学部学生用図書館のサービスの変化
 - A. 既存の学部学生用図書館における変化の顕著な事例
 - B. 新設された学部学生用図書館の事例
 - C. 1990年代以降の学部学生用図書館の傾向
 - D. 学部学生用図書館のサービスの変化の背景
- V. 学部学生用図書館の役割と概念
 - A. 現在の学部学生用図書館の役割
 - B. 学部学生用図書館の概念の変化
 - C. 終わりに

I. アメリカにおける学部学生を対象とする大学図書館のサービス

A. アメリカの動向に対する日本における注目

近年、日本では、アメリカにおける学部学生と学部教育を主な対象とするサービスに関する先進的な議論や事例が注目されている。これは、大学教育改革の動向とそれに呼応した図書館における学習支援や教育支援への関心の高まりを背景としている。特に日本では、サービスに関するものとして、情報リテラシー、インフォメーション・コモنز、ラーニング・コモنز、大学図書館員のあり方に関するものとして、ブレンディッド・ライブラリアン、リエゾン・ライブラリアンが注目されている。

情報リテラシーは、現在のアメリカの大学図書館において、図書館の中核的理念として位置づけられている¹⁾。大学研究図書館協会（Association of College and Research Libraries: ACRL）は、2000年に「高等教育のための情報リテラシー能力基

準」(*Information Literacy Competency Standards for Higher Education*)²⁾を公表している。そこでは、情報リテラシーが自立した学習者になるために必要な能力とされている。現在、アメリカで考えられている情報リテラシーとは、必要な情報の特定とそれへのアクセス、情報の評価、得た情報の内面化、情報の効果的な利用、情報を取り巻く問題への理解などを含んだものである。情報リテラシーは、単に図書館や図書館資料、インターネットなどの活用に関する知識があるといったこと以上のものを意味し、その能力の養成は、アメリカの大学図書館が果たすべき重要な役割となっている。

情報リテラシー教育と相補的な関係に位置するのが、インフォメーション・コモنز、ラーニング・コモنزである。インフォメーション・コモنز、ラーニング・コモنزは特に学部学生のニーズに焦点をあてたサービスモデルであり、ACRLの「高等教育のための情報リテラシー能力基準」で掲げられているような情報リテラ

シーを学部学生が習得するために有効であるとされている。Bailey らによると、インフォメーション・コモンズとは、学生に対して電子情報資源、マルチメディア、印刷資料、様々なサービスへの統合的なアクセスを提供する情報サービス提供のモデルのことである。そして、ラーニング・コモンズとは、インフォメーション・コモンズを拡張させたものであり、なおかつ大学全体のビジョンやミッションと明確に繋がった、従来は図書館の外にあった機能や活動を図書館に取り込んでいるといった特徴をもつサービスモデルのことである³⁾。このインフォメーション・コモンズからラーニング・コモンズへのサービスモデルの変化は、知識の伝達から知識の創造、自立的な学習という学部教育の新たなパラダイムを反映したものであるとされている⁴⁾。

以上のような大学図書館の変化に対応する形で、新しい大学図書館員のあり方も提唱されている。近年、アメリカでは、伝統的な図書館に関する知識とともに教育工学や学習理論などの知識を兼ね備え、教育への関与、教員や学内の専門家との協働を行う図書館員の新しい姿として、ブレンディッド・ライブラリアンという概念が提唱されるようになってきている。これは、図書館員を学習と教育のプロセスのなかに統合するための試みである^{5)~7)}。その他、近年日本で注目を集めているアメリカでの取り組みとして、学部学科との仲介や連携を担うとともに、担当分野での学生や教員に対するサービスを選書からレファレンスまで行う、リエゾン・ライブラリアン制度がある。リエゾン・ライブラリアンは、主題知識そのものよりも担当する分野との連携が重視される点に特徴がある⁷⁾。ブレンディッド・ライブラリアンやリエゾン・ライブラリアンの試みは、学部学生や学部教育のみを対象にしたものではないが、それらとの関連が深いといえるだろう。

B. 学部学生用図書館への着目と本研究の目的

日本で関心を集めている先進的な事例のなかには、学部学生と学部教育に対するサービスに機能特化した学部学生用図書館 (undergraduate

library) における事例が複数存在している。たとえば、カリフォルニア大学バークレー校の情報リテラシー担当部署 Teaching Library、南カリフォルニア大学のインフォメーション・コモンズ、ワシントン大学のラーニング・コモンズなどは、学部学生用図書館の事例である。学部学生と学部教育に対するサービスを考える際に、実際のサービス事例の面においても、その役割や位置づけの面においても、それらに対するサービスに機能特化してきた歴史を持つ学部学生用図書館は注目し得る存在である。

しかしながら、日本の文献では、アメリカの学部学生用図書館について言及しているものは少ない。上記のような、学部学生用図書館での先進的なサービス事例について言及している文献には、サービスを行っているのが学部学生用図書館であること、学部学生用図書館がどのような役割を持っているか、どのような環境のもとにあるか、どのような背景や経緯のもとにあるかといったことを踏まえたものはほとんどない。

その一方で、少数ながら、大学教育と図書館の関係、大学図書館の学習図書館機能や学習支援・教育支援について述べた文献において、学部学生用図書館の役割あるいはサービスについて言及しているものが存在する。小島は、日本における学習図書館機能の検討を行う際に、それに示唆を与えるものとして、アメリカにおける学部学生用図書館の役割と1970年代までの学部学生用図書館の流れを概観している⁸⁾。川嶋は、大学教育の充実のための図書館の重要性を指摘するなかで、アメリカの大学図書館への訪問調査をもとに、「研究への入口」「中核的な蔵書への入口」といった、学部学生用図書館のコレクションが持つ入口としての役割に言及している⁹⁾。土屋は、大学改革における図書館の役割を検討する際に、アメリカの大学における研究図書館と学部学生用図書館に言及し、学部学生用図書館が持つ学習支援機能が今後の日本の大学図書館にとって重要なものであるとしている¹⁰⁾。三浦は、大学教育改革のなかでの大学図書館の学習・教育支援機能に言及する際に、アメリカの学部学生用図書館の特徴や経緯と

そこで発展した文献利用指導といったサービスの流れ、学部学生用図書館に関連する新たなサービス展開の動きについて述べている¹¹⁾。呑海らは、アメリカとカナダにおけるラーニング・コモンズに至るまでの大学図書館での学習支援空間の変遷を見る際に、学部学生用図書館を先駆例として取り上げ、その歴史と定義、特徴を述べている¹²⁾。

学部学生用図書館の役割や背景、経緯に言及している文献は、現在（文献発表当時）の学部学生用図書館でどのようなサービスが行われているかについては言及していない、あるいはサービスの言及はしているが詳細な検討は行っていない場合が多い。また、先述のように、学部学生用図書館での先進的なサービス事例について言及している文献には、学部学生用図書館の役割や背景、経緯を踏まえているものはほとんどない。

一方、学部学生用図書館の研究が長年行われているアメリカの文献でも、網羅的かつ最新の動向が示されているわけではない。アメリカにおいても、1980年代の研究以降、学部学生用図書館を設置する全大学を対象とする詳細な調査は行われていない。また、当然のことながら、文献の発表以降に行われるようになった事例や文献では取り上げられていない事例も存在する。

本研究の目的は、1990年代以降から現在までを中心とする、アメリカの学部学生用図書館のサービスと概念の変化の検討をとおして、学部学生用図書館の変遷を明らかにすることである。その際に、日本の既往文献では扱われていない、学部学生用図書館の役割や背景、経緯を踏まえた近年の学部学生用図書館の動向を見ることにした。本研究が試みたような網羅的かつ最新の調査は、筆者の知る限り、アメリカにおいても行われていない。

以下、第II章において学部学生用図書館の定義と歴史を概観し、さらに本研究で1990年代以降の変化に注目する理由を述べ、第III章では1990年代以降の学部学生用図書館のサービスに関する調査の概要を説明する。続いて、第IV章において学部学生用図書館のサービスの変化をまとめ、第V章では前章で述べた学部学生用図書

館のサービスの変化にもとづき、学部学生用図書館の役割と概念の変化を考察する。

なお、本研究では *undergraduate library* という言葉に対して、「学部学生用図書館」という訳語を使用している。日本では、*undergraduate library* に対して「学部学生用図書館」以外にも、「学習図書館」、「学部図書館」といった訳語が用いられる場合がある。本研究では、『図書館情報学用語辞典 第3版』¹³⁾ で *undergraduate library* の訳語として「学部学生用図書館」が用いられている点などを参考にし、「学部学生用図書館」を使用することにした。また、昨今では「学士課程教育」「学士課程学生」という表現がよく用いられているが、本論文ではこれを「学部教育」「学部学生」と表現する。

II. 学部学生用図書館の概要

A. 定義

学部学生用図書館に関する研究において問題となるのは、学部学生用図書館という言葉が何を意味しているのかが明確ではないことである。学部学生用図書館に関する基本文献の1つである、*A New Path: Undergraduate Libraries at United States and Canadian Universities, 1949-1987*¹⁴⁾ を執筆した Person は、この文献において、学部学生用図書館には定義がない、あるいは少なくとも合意された定義がないという問題があると指摘している。

実際、どこまでを学部学生用図書館ととらえるかは著者によって様々であり、文献によってその範囲が異なっている。これまでの関連文献での学部学生用図書館のとらえ方は、1) 中央館とは別の独立した建物において、学部学生向けのコレクションや設備、サービスを提供するもののみを学部学生用図書館としている場合 (Mills¹⁵⁾, Braden¹⁶⁾ など)、2) 1) に加えて、中央館の一面において、学部学生向けのコレクションや設備、サービスなどを提供するものも学部学生用図書館としている場合 (Person¹⁴⁾, Haak¹⁷⁾, Keever¹⁸⁾, Wingate¹⁹⁾ など) に大きく分かれる。以上のように立地によって学部学生用図書館の範囲を規定

している場合の他に、提供するサービスによって範囲を規定している場合がある。たとえば、Wingateは学部学生向けのコレクションを持つ場合に全て学部学生用図書館としているが¹⁹⁾、Personはそこでレファレンスやインストラクションといった人的援助が行われているもののみを学部学生用図書館とし、それらが行われていない場合は学部学生向けのコレクションがあったとしても学部学生用図書館とはとらえていない¹⁴⁾。このように、文献における学部学生用図書館のとらえ方には多様性がある。これは、学部学生用図書館と呼ばれているものの立地やサービスの範囲に多様性があるために生じた問題である。

このように、学部学生用図書館をどのようにとらえるかには幅がある。しかし、学部学生用図書館に関する文献のうち、代表的な定義や特徴を述べているとされており、後の文献において引用されることが多い文献がいくつか存在する。それらは、具体的にはBraden¹⁶⁾、Wilkinson²⁰⁾、Haak¹⁷⁾の文献である。

Bradenは、学部学生用図書館を大規模な研究大学における学部学生へのサービスを改善するためのものであるとし、学部学生の利用に即している独立した建物のなかで、学部学生のために厳選した開架式コレクション、従来はなかった新しい設備（グループ学習室、オーディオ機器、タイプライター、学生用ラウンジなど）を提供し、学部学生に対する図書館利用指導を行う図書館であると述べている。そして、これらの特徴から、学部学生用図書館が従来の研究大学の図書館とは異なる新しいタイプの図書館であるとしている¹⁶⁾。

Wilkinsonは、学部学生用図書館は研究大学の環境における学部学生のための図書館であり、サービス対象者は学内の全ての学部学生であるが、特にリベラルアーツ分野を専攻する学部学生が中心であると述べている。そして、学部学生用図書館の特徴を、学習と社交のためのスペース、リザーブ図書や開架式コレクション、視聴覚サービス、学生への人的援助の面からとらえている²⁰⁾。

Haakは、学部学生用図書館の定義として、“1)

学部学生のための特別な図書館である、2)かなりの程度、大学院での研究を支援する大学において設置される、3)独立した建物、もしくは他の建物の一画にある、4)学部教育を支援し補完するためのコレクション、学部教育課程のなかに図書館を統合することを促進するためのスタッフとサービスから成り立つ”¹⁷⁾、という4項目をあげている。Personは、このHaakの定義が、様々な著者による定義のなかで、最も明確であり、最も注意深く物理的な側面とともにサービスを強調しているものであると評価している¹⁴⁾。

Bradenは独立した建物のみを対象としているのに対し、Haakは他の図書館の一画にある図書館も対象としている。Wilkinsonの文献では、学部学生用図書館を独立した建物としている部分と他の図書館の一画にあるものもそれに含めている部分がある。これらは、立地に関しては異なるが、研究大学において学部学生を対象とする点と、学部学生向けのコレクションやサービスを提供しているという点では共通している。

以上見てきたように、文献における学部学生用図書館の定義と範囲が様々であることは確かである。しかし、研究大学という環境のなかにあり、学部学生と学部教育を主な対象とするものである点は合意されていると考えられる。ACRLのディスカッション・グループの1つであるUndergraduate Librarians Discussion Groupによって1979年に発表された、*The Mission of an Undergraduate Library: Model Statement*²¹⁾では、学部学生用図書館の目的を“大規模大学の環境において学部学生の図書館に対するニーズを満たすことに一義的な責任を持つこと”としている。そして、学部学生用図書館は、研究志向が強い大学という環境のもとで存在する図書館であるとしている。

本研究では、学部学生用図書館を広くとらえるため、最大公約数的な「研究大学に存在する、学部学生と学部教育のための図書館」を学部学生用図書館と規定し、既往文献において学部学生用図書館とされたものをすべて学部学生用図書館と見なすことにする。

B. 歴史

1. 学部学生用図書館の設立とその背景

学部学生用図書館は、20世紀のアメリカにおいて生み出された図書館である。学部学生用図書館設立の背景には、19世紀後半以降のアメリカにおける研究大学の発展が重要な要素として位置づけられている^{14)~16)}。1636年のハーバード大学設立以来、アメリカの大学は教育を重視する4年制のカレッジとして存在してきたが、19世紀後半になると研究と大学院教育を重視する研究大学が出現した。アメリカにおける研究大学の嚆矢は、1887年に当時の先端モデルであったドイツ・モデルを導入したジョンズ・ホプキンス大学である。同時に、ハーバード大学などのように4年制カレッジであった大学のなかから、学部教育に加え研究と大学院教育を行う大規模な研究大学へと変化した大学も現れた。20世紀になると研究重視の傾向はさらに強まっていき、第1次世界大戦を境にアメリカは世界の学問の中心となっていった²²⁾。

研究大学の出現と研究重視の傾向は、大学図書館にも変化をもたらした。研究大学の図書館では、研究コレクションの重視、コレクションの増加による図書館の複雑化、教員と大学院生へのサービスの重視という傾向が見られるようになった。研究大学の図書館は複雑で、研究コレクションを多く所蔵し、学部学生にとって利用し難いものとなっていた。研究大学の図書館では学部学生へのサービスは重視されておらず、彼らは図書館利用に困難を抱えていた。その一方で、20世紀に入ると、アメリカの大学では学部学生の増加、学部教育における読書や図書館利用の推奨といった動きも見られるようになった^{14)~16)}。

上記のような流れに対応するために、いくつかの大学では小規模ではあるものの、学部学生向けのコレクションや閲覧室を中央館のなかに設けるようになった^{14),16)}。また、この頃になると、学部学生に対するレファレンスや図書館利用指導への関心も、以前より高まっていた^{15),23)}。

1949年のハーバード大学のLamont Libraryは、以上のような状況を背景として設立されたもので

ある。Lamont Library設立以前にも、中央館のなかの学部学生向けのコレクションや閲覧室、学生寮のなかの図書室といったものは存在していた。しかし、一般に最初の学部学生用図書館であるといわれているのは、1949年の設立時に新たな建物を建てたLamont Libraryである。Personが、Lamont Libraryは以後の他の学部学生用図書館の評価基準であったとしているように¹⁴⁾、Lamont Libraryは現在の学部学生用図書館のイメージの原型であるといえる。

独立した建物の学部学生用図書館は、ハーバード大学の図書館長であったMetcalfが1939年より提唱していたものである¹⁴⁾。Metcalfは、研究大学においても学部学生がリベラルアーツ・カレッジの図書館で提供されているサービスと同様なサービスを受けられるようにするべきであると述べ、大学院生と教員、学部学生という2つのグループに対して同じ建物や資料を用いたサービスを提供する際に困難を持つのは学部学生であり、学部学生は図書へ自由にアクセスできず、また彼らにとってちょうど良い規模の一般的なコレクションがないという研究大学の図書館における学部学生の利用の困難さを指摘していた。さらに、図書館のコレクションや必要なスペースが増加しているという問題に対する解決策として、中央館のために新しい建物を建てるのはコストがかかるとし、中央館ではなく目的別の小さな建物を建てるほうが経済的であるとも述べていた²⁴⁾。研究大学の図書館における学部学生の利用の困難さ、中央館の狭隘化という問題を背景に、Metcalfは学部学生用図書館の設立を主張していた。このようなMetcalfの提案にもとづき、Lamont Libraryは設立された。新しく快適な建物のなかで、学部学生にふさわしい厳選されたコレクションを開架式によって提供するLamont Libraryは、学部学生が自由に、そして困難を感じずに利用できる図書館であった^{14)~16)}。さらに、このLamont Libraryの設立に影響を受ける形で、他の大学でも学部学生用図書館が設立されるようになった^{15),20)}。

このように学部学生用図書館は、1)コレクションや必要なスペースの増大によって、中央館が

狭隘化していた、2) 中央館の狭隘化の一方で、学部学生の人数が増加しており、彼らを収容できるスペースも必要となっていた(第2次世界大戦後になると学部学生の数はさらに増加していた²²⁾、3) 学部学生にとって、複雑かつ研究図書が多い中央館は利用しにくい、4) 中央館が学部学生に対して書庫入室を禁じるなど利用を制限していた、5) 学部学生に対するサービスが重視されていない^{14)~16), 20)}、といった研究大学の図書館に顕著な環境のもとで、中央館から機能分化した図書館であった。

これらの背景を持つ学部学生用図書館は、研究大学のなかで学部学生に対してより良い図書館サービスを行うことを目指すものであった。たとえば、Mills は、学部学生用図書館を、学部学生を重視していなかった過去の過ちを修正し、彼らに対して学習における新しい投資を行う試みであると述べている¹⁵⁾。

2. 学部学生用図書館の発展と減少

1960年代から1970年代前半は、学部学生用図書館が増加した時代であり、学部学生用図書館の発展の時期であった。当時の学部学生用図書館に関する文献では、様々な研究大学が学部学生用図書館を設立したこと、その他の研究大学でも学部学生用図書館を設立する計画を立てていることが述べられている^{15), 20)}。

さらに、1960年代から1970年代にかけては、量的拡大だけでなく、学部学生用図書館の概念の変化が見られるようになった時代でもあった。

Person は、学部学生用図書館の概念において、初期にはコレクションだけでなく施設の重要性が強調されていたが、1960年代になると学部学生用図書館が行うサービスが強調されるようになり、1970年代になるとサービスは図書館の物理的な属性より重要であると考えられるようになったとしている。そして、学部学生用図書館が行うサービスのなかでも、特に図書館利用指導が重視され、学部学生用図書館の教育的役割が強調されるようになったと述べている¹⁴⁾。1971年に発表されたHaak¹⁷⁾とWilkinson²⁰⁾の文献でも、今

後の学部学生用図書館の展開として、教育的役割の発展が指摘されていた。実際、学部学生用図書館は、リベラルアーツ・カレッジで先進的に行われてきた、文献利用指導を研究大学に導入する際に積極的な役割を果たしており、それをとおして文献利用指導は学部学生用図書館において重要なサービスとなった²⁵⁾。

このように、1960年代から1970年代にかけて、学部学生用図書館の概念は、「物理的な存在としての学部学生用図書館」から「学部学生用図書館によるサービス」と教育的役割の強調へと変化した。しかし、学部学生用図書館は、1960年代から1970年代前半にかけての発展の時代を過ぎたのちに、1970年代半ば頃からその数を減少させていった¹⁹⁾。Personの調査からは、1) 1971年に3大学、1975年に5大学で学部学生用図書館が閉鎖されており、この頃から学部学生用図書館の閉鎖がほぼ毎年見られるようになった、2) 一方で、学部学生用図書館の新たな設立は1970年代半ばになると稀にしか見られなくなっている、3) 学部学生用図書館を設置している大学が最も多かったのは1973年の43大学であり、その後は減少している、ということが分かる¹⁴⁾。Wingate は、1972年には学部学生用図書館は49大学で存在していたが、1977年には37大学に減少していると述べている¹⁹⁾。PersonとWingateとでは、学部学生用図書館としてとらえる範囲が異なるため、数に違いはあるものの、1970年代半ば頃からの学部学生用図書館の減少を指摘している点では一致している。

Keever は、学部学生用図書館の閉鎖の理由として、1) 予算の緊縮のため、2) 建物を他の用途に利用するため、3) 中央館の一面にある場合、学部学生用図書館の騒音が問題となっていたため、4) 授業以外での自発的な読書を促進するという考え方が楽観的すぎたため、5) 学部教育が教科書と講義のモデルから学部学生の自立的な学習を重視するモデルに変化し、学部学生と大学院生のニーズに違いがなくなってきたため、6) 学部学生が大多数を占める大学であったため(学部学生のための図書館を別に作る必要はなかった)、7)

コレクション数の少ない大学にはそぐわないため（小規模な学部学生のためのコレクションを別に設ける必要はなかった）、という理由をあげている¹⁸⁾。

Wingate は、学部学生用図書館の閉鎖の理由として、1) 以前と比べて様々な分野が扱われるようになったことや教科書と講義から課題読書の重視への変化といった、学部教育における教育課程と教授法の変化によって、学部学生が必要とする図書の範囲が広がり、学部学生のための厳選されたコレクションを集めることが難しくなったため、2) 資料とサービスの重複を不可能にするような図書館予算の緊縮のため、3) 独立した建物あるいは学部学生のための一画といった形で他から区分されている施設は、大きな研究図書館でのみ提供できるような学部学生の学習経験を奪うという認識が持たれるようになったため、という理由をあげている¹⁹⁾。

Person は、学部学生用図書館の閉鎖の理由を、学部学生用図書館設立時の計画や支援の不十分さなどの内的要因、学部学生用図書館設立時には想定していなかったできごとに起因する外的要因に分けている。具体的には、内的要因として、利用者が複雑な図書館システム²⁶⁾に困惑していたこと、スペースや資金が不十分であったこと、学部学生が大多数を占める大学であったことなどがあげられている。外的要因としては、予算緊縮が高まったこと、スペースが他の用途のために必要となったこと、中央館の組織再編、中央館の書庫開放などが指摘されている¹⁴⁾。

学部学生用図書館に関するシンポジウム²⁷⁾において、学部学生用図書館に関する研究の第一人者であった Braden Hoadley が、学部学生用図書館の減少の要因を指摘している。Braden Hoadley は、学部学生用図書館は文献利用指導の発展において重要な役割を果たしてきたと述べている。さらに、視聴覚サービス、会議室、グループ学習室、学生用ラウンジ、学生を図書館に呼び寄せるためのプログラム、アウトリーチ・サービスといった、その他の新しいサービスも学部学生用図書館が先進的に導入したものであったとしている。た

だし、それらが学部学生用図書館を超えて研究大学の他の図書館に広まるにつれて、学部学生用図書館の存在意義が失われていき、学部学生用図書館の閉鎖という状況も生まれたと指摘している²⁷⁾。

多くの大学において学部学生用図書館の閉鎖は複数の理由によって起きており¹⁴⁾、単一的な要因によるものではなく、様々な要因が重なった現象であったといえる。文献では、大学教育の変化、予算の緊縮、中央館の事情といった理由が共通する理由として指摘されている。また、学部学生用図書館が先進的に取り組んだサービスが研究大学の他の図書館にも広まるにつれて、学部学生用図書館の存在意義が失われていったということも、学部学生用図書館の閉鎖において重要な要因であったといえる。

3. 新たな方向性の模索

a. 教育的役割の強調

学部学生用図書館の閉鎖という状況のなか、学部学生用図書館の役割やサービスを明確化し、その存在意義を示す試みも現れた。ACRLの Undergraduate Librarians Discussion Group は、1979年に学部学生用図書館のためのミッション・ステートメントである、*The mission of an undergraduate library: Model statement*²¹⁾を発表している。そこでは、図書館の利用方法を指導することが学部学生用図書館の基本的なサービスであるとされ、学部学生用図書館における教育的役割が強調された内容となっていた。これは、1960年代から1970年代に見られた、「物理的な存在としての学部学生用図書館」の強調から「学部学生用図書館によるサービス」と教育的役割の強調という、学部学生用図書館の概念の変化を反映したものであるといえる。

学部学生用図書館の概念の変化、すなわち上記の *The mission of an undergraduate library: Model statement* において見られた、学部学生用図書館における教育的役割の強調に関連するものとして、「ティーチング・ライブラリー (teaching library)」概念がある。「ティーチング・ライブラ

リー」とは、図書館が大学における学習・教育・研究、および、コミュニティ・サービスなどの諸活動に対して積極的かつ直接的に関わり、大学のミッションへの貢献を目指すことを示す概念として考えられたものである。「ティーチング・ライブラリー」概念は、文献利用指導を中核的なものとし、その他学内外の生涯学習の促進、ニーズに合わせた適切なコレクションの維持、文化的活動などを重視するものであった^{28), 29)}。これは、図書館の教育的役割や学習を促す環境の醸成に関するモデルを示すものであったといえる。Stoffleは、学部学生用図書館が「ティーチング・ライブラリー」として活動を行ってきたと述べている³⁰⁾。このように、学部学生用図書館は、大学図書館における教育的役割の強化の動きとも関わりを持っていた。

1980年代になると、アメリカでは教育改革への関心が高まっていた。学部教育の改革に関しても様々な提言が出され、多くの大学で学部教育の強化、教育課程や教授法の改善が試みられた²²⁾。そのなかで、大学教育の側からも図書館の教育的役割が注目されるようになった。1987年に発表されたBoyerの『アメリカの大学・カレッジ：大学教育改革への提言』(*College: The Undergraduate Experience in America*)³¹⁾では、図書館を学部教育課程の重要な一部分を担うものであるとして、学部学生のための図書館のコレクションやサービス、それを支える図書館員の重要性が指摘されていた。学部学生用図書館もこのような流れのなかで、教育的役割をさらに発展させる方向に向かっていたと考えられる。

b. 学部学生用図書館閉鎖大学の動向と新たな方向性

1980年代後半になると、学部学生用図書館の数はかなり減少していた。1987年には、Personが学部学生用図書館とした51館のうち、すでに半数ほどが閉鎖されていた。Personは、学部学生用図書館を閉鎖した大学のその後の動向についても述べている。テネシー大学では、1987年に新しい中央館が建設された際に、学部学生用図書館が閉鎖された。しかし、以前の学部学生用図書館

の責任者は図書館システム全体の利用教育の責任者となり、学部学生用図書館で行われてきたサービスは中央館に影響を与えた。他にも、閉鎖した学部学生用図書館で行われていたサービスの影響が見られる大学の例が述べられている。Personは、テネシー大学の例を学部学生用図書館が存続している大学と同様に成功例として扱い、学部学生用図書館が物理的に存在しなくなったとしても、そこで行われていたサービスは中央館に大きな影響を与えると指摘し、それを学部学生用図書館の新たな方向性であるとした¹⁴⁾。

一方、この頃は、現存する学部学生用図書館でも新たな方向性が現れ始めていた時期であった。1990年にStoffleは、「知識基盤社会」を背景とした学部教育の変化に対応すること、批判的判断を学生に対して教えること、紙媒体だけでなく電子媒体資料も重視すること、学部学生のテクノロジー活用能力の習得の援助などを、新たな学部学生用図書館の方向性として位置づけている³⁰⁾。同じく1990年に、Tompkinsは、新たな時代にあわせた「ティーチング・ライブラリー」の概念を述べている。Tompkinsは、学習モデルが能動的で統合的なものへ変化していること、そのなかで情報リテラシーが重要になっていることを背景に、「ティーチング・ライブラリー」を学部学生用図書館や研究大学の図書館にとって重要な概念であるとし、学部教育と学部学生の学習への支援が不十分である環境における試みとして位置づけていた³²⁾。

このように、1980年代後半から1990年代初頭になると、たとえ閉鎖しても学部学生用図書館の精神は残り続けるという考え方がされるようになったとともに、現存する学部学生用図書館でも、時代の変化にあわせた新たな方向性が現れ始めていた。

C. 1990年代以降における変化の指摘

1990年代はすべての図書館の目的が問われたのと同様に、学部学生用図書館の目的に焦点があてられた時代であったといわれている³³⁾。

1990年代の学部学生用図書館は、テクノロジー

の発展と利用の広がり、大学における財政的問題や学部教育の変化、学部学生の図書館利用傾向の変化という環境に置かれており、それらの影響から組織再編なども行われていた^{25), 35)}。特に、インターネットを代表とするテクノロジーの発展と広がり、1990年代の大きな特徴であったといえる。1990年代になると、コンピュータや新しいテクノロジーを積極的に利用する人々が図書館利用者のなかに存在するようになっておりと指摘されていたが³⁴⁾、この状況は学部学生に関しても同様であった。学部学生はコンピュータを利用して、課題作成、メールのやり取り、情報検索、授業関係情報の入手などを行うようになっており、ネットワークと繋がったコンピュータへのアクセスを提供することが、学部学生用図書館にとって重要なサービスになっていた²⁵⁾。

1995年にEngleは、電子化が学部学生用図書館にもたらす影響を述べている。Engleは、電子化によって大規模な研究大学において今までそれぞれの建物のなかで分断されていたコレクションやサービスが結びつくようになったと指摘している。そして、電子化の影響の例として、学部学生がオンライン図書館目録を活用して学部学生用図書館以外の図書館を利用することが増えたこと、それにともない図書館システム全体での学部学生に対するサービスの必要性が高まったことなどをあげている。さらに、電子図書館がサービスとコレクションの集中化と利用の分散化という性格を持っていることも指摘している。Engleは、上記のような電子化が図書館にもたらす影響を踏まえたうえで、いくつかの大規模な研究大学では学部学生用図書館は存続し続けるだろうが、他の大規模な研究大学では学部学生へのサービスは独立した建物と同一視されていないと指摘した。そして、学部学生はいかなる図書館でもより良いサービスを受けることができ、図書館システム全体が利用できると感じられるようにするべきであると述べている²⁵⁾。

1996年にWatsonらは、学部学生用図書館における、テクノロジーの活用、電子資料の発展などの影響を受けた図書利用の減少、スタッフ（特に

プロフェッショナルの図書館員）の減少、予算緊縮といった変化を指摘している。そして、このような変化が物理的な学部学生用図書館の消滅を導く場合もあると述べている。しかし、そのような場合でも、ほぼすべての大学において学部学生に対するサービスという理念は、それまでに確立された職員配置やプログラムのなかで存続していると指摘している³⁵⁾。この文献の共著者にはPersonがいる。1988年にPersonによって、たとえ閉鎖しても学部学生用図書館の精神は残り続けると結論づけられた方向性が、1990年代半ばにより一層明確になっていたといえる。

1990年代半ばのEngleとWatsonらは、電子化を中心とする環境の変化を背景として、学部学生用図書館だけでなく、「図書館システム全体による学部学生に対するサービス」を重視していたといえる。この方向性は、ACRLのUndergraduate Librarians Discussion Groupによる文書の変化にも見られる。1979年の*The mission of an undergraduate library: Model statement*²¹⁾以降、Undergraduate Librarians Discussion Groupは1987年³⁶⁾、1997年³⁷⁾と学部学生用図書館のための文書を作成してきた。しかし、2005年に発表されたのは、学部学生用図書館を設置している大学、設置していない大学の両方を含むすべての研究大学における学部学生へのサービスのための文書である、*Guidelines for university library services to undergraduate students*³⁸⁾であった。

学部学生用図書館を取り巻く環境の変化のなかで、学部学生用図書館のサービスの变化やリノベーションの動きも指摘されるようになった。具体的には、電子資料の提供、情報リテラシー教育の発展、バーチャル環境におけるレファレンスやチュートリアル提供、インフォメーション・コモنزの設置などが指摘されていた。そして、それらを行うにあたっての教員や他部署との協力も重視されるようになった^{39), 40)}。

さらに、学部学生用図書館の置かれた環境とサービスの变化に加え、1960年代から1970年代にかけて指摘された学部学生用図書館の概念の变化が、1990年代後半から2000年代に再び言及さ

れるようになった。

1999年にWilsonは、学部学生と彼らが生きている世界が、ハーバード大学でLamont Libraryが設立された時代から変化しており、1940年代に設立され、1950年代に発展し1970年代に再構築された学部学生用図書館は、1990年代の学生のニーズを満たしていないと指摘した。そして、その状況を解決するために、学部学生用図書館の概念の新しい考え方として、「ゲートウェイ・ライブラリー (gateway library)」を採用することを提案した⁴¹⁾。

「ゲートウェイ・ライブラリー」は、ハーバード大学College Libraryや南カリフォルニア大学Leavey Libraryなどで考えられた概念である⁴¹⁾。Dowlerは1993年に行われたハーバード大学College Library主催の会議⁴¹⁾、それをもとにした論文⁴²⁾において、“ゲートウェイは知識へのアクセスの隠喩であり、入口からなかに入る、劇的に広がっている情報と学習の世界のなかに入るというイメージを呼び起こす。ゲートウェイとしての図書館は、学生と教員が情報を探し利用するための手段である。我々が構想するゲートウェイは、様々なサービスの配置、それらのサービスを提供するために必要な組織、学生の学習に貢献するようなスペースである”⁴²⁾と述べている。ハーバード大学の「ゲートウェイ」構想は、図書館を学習と研究への入口として再定義する試みであり、テクノロジーの発展に対する対応、情報への電子的なアクセスの支援、変化する学習形態に対応した学習スペースと設備の提供、それらのためのサービスと組織の再構築といった要素が含まれていた⁴²⁾。

Wilsonの提案は、これらを受けて行われたものであった。Wilsonは「ゲートウェイ・ライブラリー」の6つの要素として、「テクノロジーの革新的利用」、「計画的連携」、「実験的環境」、「教育体制」、「多様性を包含するという包括性」、「利用者を中心に据えた擁護」をあげている。さらに、“学部学生用図書館は、スペース、コレクション、スタッフによって定義することができるものではない。学生と情報を結び付け、その情報を扱

うために必要な教育を提供するサービスによって定義されるものである”とも述べている⁴¹⁾。

2006年にLucasは、学部学生用図書館に関する文献のレビューにもとづき、学部学生用図書館の概念は、独自の建物がある独立した学部学生用図書館から、他の図書館の中の特定区画へ、インフォメーション・コモンズあるいはラーニング・コモンズへ、特定の物理的な場所から学部学生に向けた一連のサービスやプログラムに変化してきたと指摘している。そして、インフォメーション・コモンズあるいはラーニング・コモンズのモデルが学部学生用図書館に取って代わる、あるいは独立した学部学生用図書館という基本的なパラダイムが他のサービス提供モデルに変化しなくてはならないと述べている⁴³⁾。

WilsonとLucasの議論は、1990年代後半から2000年代における、学部学生用図書館の概念の変化に関する議論の代表例であるといえる。彼らは、従来とは違う考え方や手法による図書館サービスを志向し、それを学部学生用図書館の概念の変化に結び付けている。

このように、1990年代以降の学部学生用図書館において、新たなサービスの出現やリノベーションの動き（新たな設立という例もある）、概念の変化が見られるようになり、その流れは2000年代以降現在まで持続しているといえる。

D. 変化の検討

1990年代は図書館の存在やサービスが問われた時代であった。インターネットの利用が広まるなかで、人々の情報利用に変化が起きるとともに、伝統的な図書館サービス、図書館の存在自体やその将来性に対して疑問が投げかけられていた。実際に大学図書館では、インターネットなどの発展と同時期に、図書館入館者数、図書貸出冊数、レファレンス質問数の減少が起こっていたとされている⁴⁴⁾。それとともに、1980年代から続いていた、大学における財政的問題や教育改革の動きに対しても、大学図書館は対応が求められていた。その一方で、1990年代は大学図書館において、現在に繋がるような新たなサービスの展開

が現れた時代でもあった。たとえば、1980年代にその概念が確立された⁴⁵⁾といわれている情報リテラシー教育の実践における発展、電子資料の提供の広まり、インフォメーション・コモنزの設置、電子レファレンスの動きなどが見られるようになっていた。

このように1990年代は、図書館を取り巻く環境の変化のなかで、図書館の存在や目的が問われると同時に、現在に引き継がれている潮流を導いた時代であり、大学図書館にとって重要な時期、すなわち転換期であった。そのような時代の流れに沿う形で、以前よりその存在や目的を問われ続けてきた学部学生用図書館も自らを変化させ、その変化の流れは2000年代以降も続いている。学部学生用図書館の変遷を検討する際に、1990年代以降から現在までのサービスと概念の変化は注目すべきものであると考えられる。そのため、本研究ではそこに特に焦点を当てることにした。

しかし、既往文献だけでは学部学生用図書館の現時点における最新の動向を網羅的に把握することはできない。1988年のPerson以降、アメリカにおいても、学部学生用図書館を設置する全大学の現状を詳細に調査した研究は行われていない。また、近年でも、文献の発表以降に行われるようになった事例や文献では取り上げられていない事例が存在し、それらのなかにも注目すべきものがあると考えられる。学部学生用図書館のサービスと概念の変化の検討の際には、可能なかぎり網羅的かつ最新の調査をもとにする必要がある。そこで、学部学生用図書館を設置していることを把握できた全ての大学を対象に現状調査を実施し、それを踏まえたうえで、1990年代から現在までの学部学生用図書館の変化の検討を行うことにした。

III. 1990年代以降の学部学生用図書館に関する調査の対象と方法

A. 調査対象

1. 調査対象の選定

網羅的調査を行うために、活動中の学部学生用図書館を設置していることを確認した全ての大学

を調査対象とした。まず、ACRLのUndergraduate Librarians Discussion Groupのウェブサイト⁴⁶⁾に、2009年時点で掲載されていた学部学生用図書館リストを参照した。このリストは、学部学生用図書館に関する複数の既往文献において、調査対象を選定する際に利用されている。そのため、本研究でも利用することにした。リストに掲載されているもののうち、学部学生用図書館として活動中であることを確認した。各大学図書館のウェブサイトに学部学生用図書館の名前が掲載されていること、さらにウェブサイトにおいて学部学生と学部教育を主な対象とするサービスを行っていることが確認できた場合、活動中の学部学生用図書館であると判断した。

次に、上述のリストには掲載されていないが、学部学生用図書館であると判断したものも調査対象とした。文献において学部学生用図書館と言及されているもの、以前のUndergraduate Librarians Discussion Groupのリスト（機関紙として刊行されていたUGLi Newsletter⁴⁷⁾に掲載されていた学部学生用図書館の統計リスト）に掲載されていたもの、インターネットより存在を確認できたものを、上記と同じ判断基準のもとで活動中の学部学生用図書館であるか確認した。

これらの選定手順のもとで、2009年に活動中であることを確認できた学部学生用図書館を設置しているのは23大学であった（第1表）。学部学生用図書館設置大学を全て網羅していない可能性はあるものの、本研究ではこの23大学を調査対象とした。

2. 学部学生用図書館設置大学の特徴

本研究で調査対象とした学部学生用図書館を設置する23大学がどのような大学であるか、その特徴を見た。2010年版のカーネギー分類(Carnegie Classification of Institutions of Higher Education)⁴⁸⁾では、全ての大学が「研究大学(Research Universities)」と分類されている。詳細を見ると、「研究大学(大変高い研究活動性)(Research Universities (very high research activity))」が21大学、「研究大学(高い研究

第1表 2009年時点における学部学生用図書館設置大学（調査対象）

大学名	図書館名／部門名
アリゾナ大学 ¹	Undergraduate Services Team
イェール大学 ²	Bass Library
イリノイ大学アーバナ・シャンペーン校	Undergraduate Library
インディアナ大学ブルーミントン校	Information Commons/Undergraduate Services
ヴァージニア大学	Clemons Library
ウィスコンシン大学マディソン校	Helen C. White College Library
ウェイン州立大学	David Adamany Undergraduate Library
カリフォルニア大学サンディエゴ校	Center for Library and Instructional Computing Services
カリフォルニア大学バークレー校	Moffitt Library
カリフォルニア大学ロサンゼルス校	College Library
コーネル大学	Uris Library
コロンビア大学	Philip L. Milstein Family College Library
シカゴ大学	Harper Memorial Library Commons (2009年8月まで Harper Memorial Library)
ジョージ・メイソン大学	Johnson Center Library
ニューヨーク州立大学バッファロー校 ¹	Oscar A. Silverman Undergraduate Library
ノースウェスタン大学 ²	Core Collection/Core
ノースカロライナ大学チャペル・ヒル校	R. B. House Undergraduate Library
ハーバード大学	Lamont Library
パデュー大学	John W. Hicks Undergraduate Library
ハワード大学 ²	Undergraduate Library
ミシガン大学	Shapiro Undergraduate Library
南カリフォルニア大学	Thomas and Dorothy Leavey Library
ワシントン大学	Odegard Undergraduate Library

¹ アリゾナ大学 Undergraduate Services Team は Instructional Services Team, ニューヨーク州立大学バッファロー校 Oscar A. Silverman Undergraduate Library は Oscar A. Silverman Library に改組されている (2010年8月確認)。

² Undergraduate Librarians Discussion Group のウェブサイトの2009年時点のリストには掲載されていない大学。

活動性) (Research Universities (high research activity))」が2大学であった (第2表)。研究図書館が所属する研究図書館協会 (Association of Research Libraries: ARL) の会員館を調べたところ、調査対象23大学のうち22大学が会員であった⁴⁹⁾。また、調査対象大学の図書館は規模が大きく、全ての大学において、キャンパス内の複数の図書館からなる図書館システムが構成されている。

次に、主なサービス対象者である学部学生が受けている学部教育に関しても、カーネギー分類

を参照しその特徴を見た。カーネギー分類では学部教育課程の専攻のタイプを「リベラルアーツ分野 (Arts and Sciences)」と「職業教育分野 (Professional fields)」に分類している。調査対象大学のタイプを確認したところ、学部教育の専攻において、「リベラルアーツ分野」の専攻数が80%以上を占める大学が6大学、60~70%を占める大学が7大学、41~59%を占める大学が8大学、21~40%を占める大学が2大学であり、20%以下の大学は存在しなかった (第3表)。「リベラルアーツ分野」の専攻数が21~40%で

第2表 カーネギー分類による大学のタイプ

大学のタイプ	大学数
研究大学（大変高い研究活動性） Research Universities (very high research activity)	21
研究大学（高い研究活動性） Research Universities (high research activity)	2

第3表 カーネギー分類による学部教育課程の専攻のタイプ

学部教育の専攻のタイプ	リベラルアーツ分野専攻数	大学数
Arts & sciences focus	80% 以上	6
Arts & sciences plus professions	60～70%	7
Balanced arts & sciences/professions	41～59%	8
Professions plus arts & sciences	21～40%	2
Professions focus	20% 以下	0

第4表 カーネギー分類による学部教育課程における選抜度

学部における選抜度	大学数
より選抜度が高い more selective	19
選抜度が高い selective	3
記載なし	1

あり「職業教育分野」の専攻数の比率が比較的高いといえる2大学でも、各大学の統計を参照し学部学生の人数を確認したところ、「リベラルアーツ分野」を専攻する学部学生が学内で最も多いため、「リベラルアーツ分野」の規模が大きいといえる^{50),51)}。学部教育課程における選抜度に関しては、「より選抜度が高い (more selective)」とされた大学が19大学、「選抜度が高い (selective)」とされた大学が3大学であった（1大学のみ選抜度に関する記載なし）（第4表）。

以上より、学部学生用図書館を設置している大学は、既往文献で指摘されているとおり、研究志向の強い大学であるといえる。そして、学部教育に関しては、リベラルアーツ分野の専攻がそれなりの数を占め、選抜度の高い大学がほとんどである。

さらに、既往文献において学部学生用図書館の多様性が指摘されているため、現在活動中である学部学生用図書館においてもこの種の多様性があるかどうかを確認した。立地を見ると、1) 独立した建物、2) 科学図書館といった他の図書館と同じ建物内（文献では独立した建物として扱われることが多い）、3) 中央館の一画、4) 学生・学部教育用施設の建物内、に大きく分かれる。また、学部学生へのサービスに特化した部門も学部学生用図書館の一種として扱われている。現在でも学部学生用図書館はこれらの点で多様であることが分かった。

なお、本項で述べた調査対象大学の特徴に関しては、付録に大学別の情報をまとめている。

B. 調査方法

各大学の学部学生用図書館を中心として行われる、学部学生を対象とするサービスにはどのようなものがあるか、どのような方法や体制で行われているか、どのような理由やプロセスのもとで行われるようになったかを調査した。

調査方法は文献調査とし、情報源は、調査対象大学の図書館ウェブサイト、ウェブで入手可能な図書館発行情書、事例報告文献、学部学生用図書館に関する文献を中心とした。なお、図書館発行

文書とは、図書館報、図書館の計画文書、学部学生用図書館のミッション・ステートメント、リノベーションや新しいサービスの案内や報告などを指す。これら情報源から主に以下のような項目について、その内容を析出した。まず、図書館ウェブサイトからは「サービス内容の概要」「サービス方法と体制の概要」、次に、図書館発行文書と各大学の事例報告文献からは「サービス内容の詳細」「サービス方法と体制の詳細」「サービスが行われるようになった理由」「サービスが行われるようになったプロセス」、最後に、学部学生用図書館に関する文献からは「学部学生用図書館の変化の方向性とその背景の大枠」「事例の注目度の判断材料」である。

既往文献において1990年代以降のリノベーションやサービスの変化、概念の変化が指摘されていることを踏まえて、1990年代以降から現在まで行われている事例を調査範囲とした。調査の際には、1990年代以降に開始された事例、変化が起きたと考えられる事例に特に注目した。しかし、開始年代が不明な事例、1990年代以前より行われていた事例であっても、現在行われている事例は調査範囲に含めた。

主な調査は2009年5月から12月の期間に行った。本研究の結果は、この時点での調査結果に基づく。ただし、その後、2010年から2011年3月にかけて補足的調査も行った。これらの調査の結果については次章で詳細に述べる。

IV. 1990年代以降の学部学生用図書館のサービスの変化

本章では、1990年代以降の学部学生用図書館のサービスに関する調査の結果をまとめる。

まず、既存の学部学生用図書館の事例である4大学をA節、新設の学部学生用図書館の事例である2大学をB節で詳細に分析した。A節では最初の学部学生用図書館であり、そのイメージの原型であるといえる、ハーバード大学のLamont Library、現在の学部学生用図書館で特に注目すべき取り組みが行われている、カリフォルニア大学バークレー校のMoffitt Library、ワシントン大

学のOdegaard Undergraduate Library、イェール大学のBass Libraryを取り上げる。これらの大学は学部学生用図書館の変化を見るのにふさわしいと判断した大学であり、なおかつ事例報告が他大学と比較して豊富な大学であるため、選択した。次に、B節では、1990年代に学部学生用図書館を新たに設立した事例のうち、設立時に先駆的な取り組みが導入された南カリフォルニア大学のLeavey Library、最も新しく設立されたウェイン州立大学のDavid Adamany Undergraduate Libraryを取り上げる。

C節では、前節までで分析した6大学を含む、調査対象23大学における1990年代以降の学部学生用図書館の傾向をまとめ、D節では学部学生用図書館のサービスの変化の背景を述べる。

A. 既存の学部学生用図書館における変化の顕著な事例

1. ハーバード大学 Lamont Library⁵²⁾

a. 概要

ハーバード大学には規模や分野が様々である図書館が70館以上存在し、それらがHarvard University Libraryという図書館システムを組織している⁵³⁾。さらに、そのなかにFaculty of Arts and SciencesのもとにHarvard College Libraryという図書館システムがある。学部学生用図書館であるLamont Library(1949年設立)は、College Libraryに所属している⁵⁴⁾。学部学生のための人文科学と社会科学を中心とする一般的な資料、音楽資料、マルチメディア資料を主なコレクションとする図書館である。

b. 変化の流れとその背景

最初の学部学生用図書館とされ、現在の学部学生用図書館のイメージの原型であるといえる、ハーバード大学のLamont Libraryでも変化が見られるようになっていた。

Lamont Libraryが所属するCollege Libraryでは、1990年代前半に組織の変革が試みられていた。テクノロジー、経済状況、学術研究や出版の傾向の変化を背景としてCollege Libraryの戦略計画を策定する取り組みが行われ、それととも

に組織再編や人員削減も行われていた⁵⁵⁾。この戦略計画策定の取り組みから発展したものが、1990年代のハーバード大学 College Library における「ゲートウェイ」構想であった⁵⁶⁾。第II章でも述べたように、ハーバード大学の「ゲートウェイ」構想は、図書館を学習と研究への入口として再定義する試みであり、テクノロジーの発展に対する対応、情報への電子的なアクセスの支援、変化する学習形態に対応した学習スペースと設備の提供、それらのためのサービスと組織の再構築を目指したものである⁴²⁾。

「ゲートウェイ」構想を発展させる契機となった要素として、De Gennaro は次の3点をあげている。1つ目は、建設から50年近く経過していた Lamont Library にリノベーションの必要が生じていたことである。College Library の戦略計画策定の取り組みをとおして、学部学生用図書館の役割の再検討に対する関心、College Library のなかでの Lamont Library の役割の新しいパラダイムとして「ゲートウェイ」をとらえる議論などが生まれた。2つ目の要素としては、ハーバード大学図書館の分散した形態があげられている。ハーバード大学図書館の歴史において中核を成すのは、図書館の分散的な配置とそれぞれの自律的な運用である。しかし、戦略計画策定の結果として、分散にともなう不都合の克服のために、College Library ではいくつかのサービスが集中化され、レファレンス、インストラクション、アクセスに関してはより調整や協調が行われるようになった。そして、3つ目の要素は、テクノロジーの発展であり、これが最も重要とされている。De Gennaro は、Lamont Library のリノベーション計画がテクノロジーを学部教育においてどのように活用するかについて検討する機会を与え、さらにそれを超えて教育と研究における College Library 全体の役割に関する議論へと進展していった流れを述べている⁵⁶⁾。

さらに別の要因として、1990年代頃になると、ハーバード大学において図書館の利用傾向の変化が顕著になっていたこともあげられる。学際的研究や異文化研究の発展といった学術研究における

変化とその学部教育への影響により、学部学生が様々な分野の専門的な資料も利用するようになり、学部学生の研究図書館の利用が増加していた。その一方で、オンライン図書館目録の整備により、学部学生用図書館である Lamont Library や学部学生の利用が多い他の図書館における、教員や大学院生の利用が増加しており、学部学生・大学院生・教員間の伝統的な区分がもはや現実を反映していない状況であった⁴²⁾。そのため、各図書館の機能とサービスについて再考する必要が生じていたといえる。

これらが、ハーバード大学 College Library における「ゲートウェイ」構想の背景であった。この構想のなかで、Lamont Library は重要な位置を占めていたといえる。

c. 現在の Lamont Library

(1) 図書館スペースの再構成

「ゲートウェイ」構想の背景の一つとして、Lamont Library のリノベーション計画があったとおり、1990年代以降の Lamont Library では学習スペースの充実のための様々なリノベーションが行われた。具体的には、テクノロジーを活用して利用者に対する指導を行うことができる教室の設置(1994年)、Faculty of Arts and Sciences による課程での語学教育を支援するための設備や資源の提供を行っている Language Resource Center の Lamont Library 内への移動(1997年)、学部学生の嗜好に合わせて様々な学習スペースを提供するための閲覧室のリノベーション(1999年と2004年)、Lamont Library Café の設置(2006年)などが行われている⁵⁷⁾。さらに、2009年にはフレキシブルに授業やグループ学習が行える Collaborative Learning Space も設置された。必要に応じて机や椅子、ホワイトボードなどの配置が変更できるようになっており、プロジェクターやスクリーンの利用ができる他、アプリケーションを利用してグループで文書やプレゼンテーション、ウェブページなどの編集を大画面のディスプレイ上で行えるスペースとなっている⁵⁸⁾。

(2) College Library としてのサービス

1990年代以降、戦略計画策定などとおし

て、College Library ではサービスにおける協力が強まっていた。2009年の Collaborative Learning Space の設置も、College Library の運営やテクノロジー部門の図書館員、Lamont Library 以外の College Library の図書館に所属する図書館員が計画に参加しており、College Library 全体の取り組みとして行われたものであるといえる⁵⁸⁾。

様々なサービスが、個々の図書館ではなく College Library 全体として行うものとされている。たとえば、電子レファレンス Ask a Librarian⁵⁹⁾、図書館利用や主題別・授業別のガイド Research Guides⁶⁰⁾などは、College Library によるサービスとなっている。College Library では、リエゾン・サービスとして、主題や言語ごとに担当図書館員を配置し、学生に対する授業や課題に関するレファレンスや一対一のコンサルタント、教員に対する授業や課題に関するコンサルタント、授業で利用するガイドの作成や授業用ウェブサイトの支援を行っている。この「ライブラリー・リエゾン (Library Liaison)」サービスも、College Library 全体によるサービスという形態をとっている^{61), 62)}。

また、リザーブ・プログラムに関しては、Lamont Library を含む College Library の6館が参加しており、各図書館でリザーブ資料として扱う分野の住み分けが行われている。リザーブ資料の教員による指定、学生に対する情報提供や図書館提供の電子資料へのリンクなどは、Faculty of Arts and Sciences の Academic Technology Group が提供するコース・マネージメント・システムをとおして行われている⁶³⁾。

2. カリフォルニア大学バークレー校 Moffitt Library⁶⁴⁾

a. 概要

カリフォルニア大学バークレー校の図書館は、The Library という図書館システム、それには属さず特定の部局のもとにある Affiliated Libraries の2種類に大きく分かれる。学部学生用図書館である Moffitt Library (1970年設立) は、The Library に所属している⁶⁵⁾、人文科学と社会科学分野の学部学生向けや入門者向けのコア・コレクション

を所蔵する図書館である。運営は、中央館である Doe Library と一体的に行われている⁶⁴⁾。

b. 変化の流れとその背景

1990年代の Moffitt Library に関する取り組みにおいて、最も注目すべきものは、1993年に設立された情報リテラシー担当部署の Teaching Library であったと考えられる。Teaching Library は、教室と図書館の情報資源のあいだのギャップを埋めることを目的として設立された。その目標は、すべての卒業生が彼らの分野の資源やツールに精通し、それらの効果的な利用を身につけ、さらにそれを超えて他分野の情報源での検索を行えるように備えさせることであった。人文科学と社会科学に重点を置き、特定の授業に適した資源や検索戦略を教える授業内でのプレゼンテーション、オンライン図書館目録やインターネット資源に関する図書館でのワークショップ、電子的ツールや資源に重点を置いた教員に対するセミナーが行われ、さらに多くの学部教育課程の授業において、教員と連携して授業のなかで行われるインストラクション・サービス (course-integrated instructional services) を提供していた⁶⁶⁾。

Teaching Library の設立の背景には、オンラインでのデータベースやサービスの利用が増え、学生が研究のために図書館の物理的なスペースに來なくてはならないことが徐々に減ってきた状況があった。初代の責任者であった Meltzer は、上記のような状況のなかで、図書館員はもはやレファレンスデスクに來る学生を受動的に待つ者ではなく、教室にいる学生を捜し出す「教員」であると考えられ、Teaching Library が設立されたと述べている。そして、Teaching Library は、Moffitt Library の拡張ではあるが、新しい方法で構想されたものであって、新しい名前と性格を与えられたことによって、学内外での関心を引いたとしている⁶⁷⁾。

Teaching Library は、情報リテラシー教育を授業内外において広めること、授業への関わりを積極的に推進することを試みるものであった。さらに、図書館員の活動の場を図書館の外にも求めることを明確に打ち出していたといえる。

c. 現在の Moffitt Library

(1) 学部教育への関わりの強化

カリフォルニア大学バークレー校では、1993年に Teaching Library が設置されており、1990年代前半の時点で学部教育への関わりを志向する傾向が強まっていた。現在ではその傾向がさらに強まっているといえる。

カリフォルニア大学バークレー校の図書館システムである The Library には、「ライブラリー・リエゾン (Library Liaison)」制度がある。この「ライブラリー・リエゾン」では、多くの大学で見られる学科やプログラムごとに担当図書館員を配置する制度⁶⁸⁾の他に、それを拡張した学習と教育面において学生・教員・職員を支援する部署に対するリエゾン制度^{69),70)}も行われている点に大きな特徴がある。この担当者の多くは、Teaching Library に所属する図書館員である^{69),70)}。担当者はそれぞれの部署への情報やサービスの提供に関して第一義的な責任をもっており、各部署に対して図書館の資源を利用した研究のためのコンサルタントやインストラクションのサービスを行っている⁷¹⁾。

さらに、学部教育の改革が試みられた「Mellon Library/Faculty Fellowship for Undergraduate Research」(以下「Mellon Initiative」)⁷²⁾も注目すべきものである。「Mellon Initiative」は、メロン財団からの助成によって、2002年に図書館と副学長室が中心的な役割を果たして創設されたプロジェクトであり、教員・図書館員・教育技術者・教授法の専門家などの協働による活動が行われた。

「Mellon Initiative」の目的は、1998年にカーネギー教育振興財団のボイヤー委員会 (Boyer Commission) が発表した『学部教育の再編：アメリカの研究大学のための青写真』(*Reinventing Undergraduate Education: A Blueprint for America's Research Universities*)⁷³⁾のなかで提唱された、学生が主体的に探究しながら学ぶ「研究に基づく学習 (research-based learning)」を学部教育のなかで導入し、学部学生の学習を活性化することであった。この目的のもとで、授業と課題をとおし

て学生が「研究に基づく学習」を行い、情報スキルと批判的思考能力を発達させることが目指された⁷²⁾。

図書館では、「Mellon Initiative」をとおして、「ライブラリー・リエゾン」を学部教育課程のカリキュラムのなかに統合することが試みられた。「ライブラリー・リエゾン」の図書館員は、教育技術者や教授法の専門家、評価の専門家とともに実施チームの一員として活動していた。「ライブラリー・リエゾン」による取り組みのなかには、図書館員が教員に対して行う、課題やシラバスに関するコンサルタントがあった⁷¹⁾。このコンサルタントの結果として生まれた課題やシラバスは、図書館資料を含む様々な情報の利用、情報の評価、自らの研究成果の表現を重視するものになっている⁷⁴⁾。

すでに述べたように1993年設置の Teaching Library は Moffitt Library の拡張という位置づけであった。しかし、現在の学部教育への関わりの試みには、The Library の各図書館に所属する図書館員も参加しており、学部学生と学部教育に対する支援を図書館システム全体で取り組むようになっているといえる。さらには、学部教育の改革という大学の目標のもとで、教員や図書館以外の部署との協働も行われ、大学全体での活動を志向するという方向性も明確になっているととらえることができる。

(2) 学部学生対象の表彰制度の設置

「Mellon Initiative」での「研究に基づく学習」の推進の動きとともに、学部学生の積極的な学習を促すための学部学生の研究プロジェクトを表彰する制度も、図書館によって設置されている。この「Library Prize for Undergraduate Research」⁷⁵⁾は、2002年に開始されたものであり、カーネギー教育振興財団のボイヤー委員会が「研究に基づく学習」を提唱した『学部教育の再編』のなかで述べている、「探求に基づく学習 (inquiry-based learning)」を推進することを目的としている。図書館が開催する学部学生の研究プロジェクトに対して賞金を出す表彰制度としては、アメリカで最初のものであり⁷⁶⁾、評価の対象は、学部学生が

授業のなかで取り組んだ研究プロジェクトのうち、図書館の資源や資料を利用しているものとされている。評価の際には、1) 学生の研究プロジェクト自体、2) 文献リストなどの利用した資料のリスト、3) 学生が書いた調査や研究プロセスに関するエッセイ、4) 教員による推薦状をもとに、研究プロジェクトの質と学生の情報リテラシー能力が評価されている。

(3) リノベーション計画

Moffitt Library では、近年の学部学生の学習と研究のニーズに対応するためにフレキシブルかつ協働的でテクノロジーが活用できるスペースを提供すべく、2014年にリノベーションが計画されている^{77), 78)}。リノベーションでは、学生がプレゼンテーションの練習やグループでのプロジェクトの作業を行うことができるスペース、コンピュータ・スペースとその設備、創造的な作品や学部学生の研究の成果物を展示するスペース、個人学習とグループ学習のための学習スペースの整備や拡張などが計画されている⁷⁹⁾。今後の動向も注目すべきであるといえる。

3. ワシントン大学 Odegaard Undergraduate Library⁸⁰⁾

a. 概要

ワシントン大学には、University of Washington Libraries という図書館システムがあり、学部低学年を主要なサービス対象とする学部学生用図書館の Odegaard Undergraduate Library も所属している⁸¹⁾。Odegaard Undergraduate Library は、1963年に中央館に設置された学部学生用図書館を前身として、1972年に Odegaard Undergraduate Library として設立されたという経緯を持っている^{14), 82)}。

b. 変化の流れとその背景

1990年代のワシントン大学において注目すべきものは、1) 1991年の戦略計画に端を発する利用者を中心に据えて図書館を再構成する取り組み、2) 1994年に開始された図書館と他部署との協働による教育へのテクノロジー導入の取り組みであった。

(1) 「利用者志向の図書館」

1990年代のワシントン大学の図書館の方向性を形作ったのは、1991年の戦略計画において提唱された「利用者志向の図書館 (user-centered library)」という概念であったといえる。ワシントン大学における「利用者志向の図書館」とは、利用者の情報とコミュニケーションのニーズに焦点をあてた図書館を意味し、利用者を志向した組織体制のなかでの運営やサービスを目指したものであった。1991年の戦略計画において「利用者志向の図書館」が提唱された後、ワシントン大学ではそれを実現するための模索が行われた。そのなかで、利用者の把握、利用者の情報ニーズの把握、利用者満足のための利用者調査が様々な形で行われ、それらは「利用者志向の図書館」の実現において重要な役割を果たしていた⁸³⁾。図書館システム全体において、利用者志向のサービスを目指す方向性が現れていたことは、Odegaard Undergraduate Library にも影響を与えていたと考えられる。実際に、利用者調査の結果として、学習し、集い、協働するための場所としての図書館が学部学生に重視されていることがあげられている⁸³⁾。これは1990年代以降の Odegaard Undergraduate Library が重視する方向性であったといえる。

(2) 教育改革への関わり

1994年に開始された「UWired」⁸⁴⁾というプロジェクトも、1990年代の Odegaard Undergraduate Library における重要な要素であった。「UWired」は、当時の学長のイニシアチブのもとで、図書館・コンピュータ部署・学部教育部の協働によって開始された。その目標は、1) テクノロジーによって学習と教育を高めるために学生と教員に対してツールと資源へのアクセスを提供すること、2) 情報と情報テクノロジーの活用を促進すること、3) テクノロジーによる学習と教育の革新を助長することであった⁸⁴⁾。

「UWired」における最初の取り組みは、1年生をグループ化して複数の授業を一緒に受講させる「Freshman Interest Groups」(FIG) への関与であった。このラーニング・コミュニティにおいて、

70人の学生にノートパソコンを提供し、図書館員がテクノロジーの利用方法に関する授業を行った^{85),86)}。この取り組みが拡張される形で、FIGでは図書館員や学生などがチームを組んだ授業が行われるようになった⁸⁷⁾。

「UWired」の取り組みは、ネットワーク環境が利用できる協働的な施設を必要としており、これに対応するために、Odegaard Undergraduate Libraryが物理的な場所の提供を行っていた。まず、最初のコンピュータ教室が設置された。コンピュータ教室は後に他の図書館でも設置されており、Odegaard Undergraduate Libraryは試験的にサービスを行う実験場所としての役割を担っていたといえる。1996年には、テクノロジー部署であるCenter for Teaching, Learning, Technology(現Learning & Scholarly Technologies)のオフィスが設けられた。1997年には、コンピューティング・コモンズ(現ラーニング・コモンズ)がOdegaard Undergraduate Libraryの2階に設置された。これは、コンピュータ利用への要求の多さに対応するために設置されたものであり、学内で最大規模のコンピュータ・センターであった^{85)~89)}。

c. 現在のOdegaard Undergraduate Library

現在、Odegaard Undergraduate Libraryは日本で注目を集めている。日本では特にラーニング・コモンズに注目が集まっているが、それ以外にも多くの注目すべき事例を行っている点に特徴がある。それらは1990年代から続く他部署との協働による新たなサービスへの試みであるといえる。

(1) レファレンスとコンピュータのサービスの統合

2000年には、Odegaard Undergraduate Libraryのリノベーションが行われている。その際に、1階のレファレンスのデスクと資料が2階のコンピューティング・コモンズ内に移動された。同時に、レファレンスとコンピュータ援助のサービスポイントの統合が行われている。これは、「ワン・ストップ・ショッピング」というサービスと概念を実現させるために行われたものであり、Odegaard Undergraduate Libraryではコンピュータ

へのアクセスと利用援助、図書館員によるレファレンスのサービスが1か所で提供されるようになった^{88),89)}。

この取り組みの背景には、2階にコンピューティング・コモンズが設置されて以降、学生がすぐに2階へ直行し、レファレンスデスクとレファレンス資料を素通りする傾向が出てきたこと、情報源のデジタル化の進展とともに、その情報源へのアクセスを行う場所の近くにレファレンスデスクが存在する必要性が出てきたという状況があった。さらに、学生にとって自分の質問がレファレンスとコンピュータに関する事柄のどちらであるかを判断することは難しいという問題も存在していた。サービスポイントの統合は、この問題に対する有効な解決策としても位置づけられていた⁸⁸⁾。

(2) テクノロジー部署との協働

Learning & Scholarly Technologies⁹⁰⁾は、学習・教育・研究で活用するためのアプリケーションの提供とともに、現在でもOdegaard Undergraduate Libraryにおいて、ラーニング・コモンズでのコンピュータや利用支援の提供、その他の様々な学習スペースの提供を行っている。具体的には、テクノロジーが利用できる協働的なスペースであるCollaboration Studios、デジタル・コンテンツ作成のための機器が利用できるDigital Audio Workstation Studio、プレゼンテーションの練習スペースであるDigital Presentation Studioがある⁹¹⁾。

学習スペースの提供とともに、テクノロジーを活用した学習を行うためのスキル習得の支援にも重点が置かれている。Learning & Scholarly TechnologiesがOdegaard Undergraduate Libraryで開催するワークショップ⁹²⁾の内容は、デジタルメディア作成、ウェブ作成、アプリケーション・ソフトウェアの利用法など多岐に渡っている。

(3) 学部教育などとの協働

Odegaard Undergraduate Libraryでは、学部教育との協働による様々な取り組みも行われている。「UWired」における最初の取り組みは、FIGへの関与であった。現在でも、このFIGに対する図書館の関わりは続いている。すべてのFIGに含ま

れている授業に、大学コミュニティへの移行を支援するための「The University Community」⁹³⁾という授業がある。この授業では、図書館や資料の利用方法などを学ぶための「Research and Discovery Project」という課題が学生に課されている。図書館では、授業別や主題別のガイドの一つとして、「Research and Discovery Project」のガイド⁹⁴⁾を作成している。

さらに、Undergraduate Academic Affairsのもとにある Undergraduate Research Program による「Research Exposed」⁹⁵⁾という授業でも協働が行われている。「Research Exposed」は、様々な分野の教員が研究の最新動向や研究活動に関するイントロダクションを行う授業である。Odegaard Undergraduate Library が開講場所となっており、Odegaard Undergraduate Library のディレクターが、Undergraduate Research Program の担当者とともに進行役を務めている^{89), 95), 96)}。

「Research Exposed」は、授業において学部学生を研究に導くための役割を持っているといえる。学部学生による研究を奨励するという方向性は、授業で取り組んだ学部学生の研究プロジェクトに対する表彰制度の創設にも現れている。この「Library Research Award for Undergraduates Program」⁹⁷⁾は、カリフォルニア大学バークレー校の表彰制度を参考にして開始された^{89), 96)}。タスクフォースのオフィスはOdegaard Undergraduate Library に設置されている⁹⁷⁾。ワシントン大学の制度がカリフォルニア大学バークレー校と異なる部分は、図書館のみで開催するのではなく、Undergraduate Research Program との協働により行われていることである⁷⁶⁾。

さらに、Undergraduate Academic Affairs, College of Arts and Science, 大学院との協力によって、Odegaard Writing and Research Center⁹⁸⁾も設立されている。これは、学部教育課程の課題で求められている情報の検索や分析を、学生が図書館の資源を利用しながら行えるようになることを支援するためのものである。学部学生と大学院生のチューター、Odegaard Undergraduate Library の図書館員によって、授業の課題などに関する学生へ

のコンサルタントが行われている^{96), 98)}。

4. イェール大学 Bass Library⁹⁹⁾

a. 概要

イェール大学には Yale University Library という図書館システムがあり、学部学生用図書館の Bass Library も所属している¹⁰⁰⁾。Bass Library は、Cross Campus Library という名称で1971年に設立され、2007年のリノベーション時に Bass Library へと改称されている。Bass Library は、学部教育課程である Yale College で扱われる分野をコレクションの対象としている。

なお、現在の Undergraduate Librarians Discussion Group のウェブサイトに掲載されている学部学生用図書館リスト⁴⁶⁾には、Bass Library は掲載されていない。また、第II章で述べた Haak¹⁷⁾の学部学生用図書館の定義を参考にして、調査対象の学部学生用図書館の選定を行った Person は、レファレンスやインストラクションといったサービスが行われていないことを理由に、Cross Campus Library (現 Bass Library) を調査対象から除外していた¹⁴⁾。しかし、以前の Undergraduate Librarians Discussion Group のリストに Cross Campus Library が掲載されていたこと⁴⁷⁾、学部学生用図書館に関する既往文献のなかで Cross Campus Library の建設計画を述べているもの¹⁵⁾や Cross Campus Library を学部学生用図書館としているもの¹⁹⁾が存在すること、2007年のリノベーションについて言及しているイェール大学の広報¹⁰¹⁾や学内新聞¹⁰²⁾において Bass Library (Cross Campus Library) を学部学生用図書館と表現していることから、本研究では Bass Library を学部学生用図書館であると判断した。

b. 近年のイェール大学の状況

近年、アメリカにおいて、イェール大学の図書館の取り組みが注目されている。具体的には、学部学生や学部教育に対する取り組み、Bass Library での取り組みに関する事例報告が、文献(2008年)¹⁰³⁾、ACRL¹⁰⁴⁾と ARL¹⁰⁵⁾の会議(ともに2009年)で行われている。

近年の図書館での取り組みには、イェール大

学における学部教育に対する取り組みが影響を与えている。イエール大学は、学部教育に関する報告書である *Report on Yale College Education*¹⁰⁶⁾ を 2003 年に発表している。その内容は、学部教育課程における一次資料の利用、ライティング、批判的思考能力の養成を強調するものとなっており、この報告書を発表した Committee on Yale College Education は、ライティングや外国語の能力を養成することを重視した学部教育課程の改革を提唱した。これを受けて、イエール大学では、学部教育強化の取り組みが行われた¹⁰³⁾。

c. 2007 年の Bass Library のリノベーション

(1) リノベーション構想

Bass Library のリノベーションは、地下道でつながっている中央館の地下部分のリノベーションと同時に進められた。この第一の目的は、当時の建築法規、テクノロジーの発展、図書館のコレクション管理基準に対応した建物にすることであった。別の理由としては、学習スペースに対する学生の期待を満たすために、図書館のサービスエリアを改良する必要があった¹⁰⁷⁾。

リノベーション構想では、Bass Library を、利用に特化した (intensive-use) 図書館¹⁰³⁾ としており、学習と教育に対する支援、テクノロジーの活用の促進、現在のニーズにあわせた設備の提供を目指していた。そのために、個人やグループでの学習のための十分なスペース、先端的な研究や新しいメディアのための基盤、学部学生用図書館と図書館システムの間での学生の発見の旅を促進するような配置を構想していた¹⁰¹⁾。

(2) サービスと設備

Bass Library のリノベーションの第一の目的は、建物を現代のニーズにあわせることであるといえる。そのため、現在の学習や教育において求められているスペースを提供するための設計が行われている。Bass Library では、ネットワーク環境やプラズマスクリーン、オーディオ機器などが利用できるグループ学習室、個人学習用のキャレル、ソファが設置されているオープン・スペースといった、様々な学習形態にあわせたスペースが提供されている。さらに、Bass Library に設置

されている教室では、スクリーン画面への書き込みなどが行える SMART Podium、ホワイトボード上の画像を取り込める CopyCam、コンピュータとの併用ができる映像入力装置である書画カメラ (Document Camera)、パーソナル・レスポンス・システム、タブレット PC などが利用でき、テクノロジーを活用した双方向的な授業が行えるようになっている^{99), 103), 108)}。

Bass Library の注目すべき点は、Collaborative Learning Center¹⁰⁹⁾ によるサービスが行われていることである。伝統的にイエール大学は分散した形態をとっている大学である。しかし、近年では様々な形での協働が行われるようになっており、Collaborative Learning Center もその 1 つである¹⁰³⁾。例えば、Yale University Library、テクノロジー部署である Information Technology Services、Center for Language Study、大学院生に対して教育の訓練などを行う Graduate Teaching Center の協働によって活動が行われている。この Collaborative Learning Center は、学習・教育・研究でのデジタルイメージや他の資料の利用を促進するためのプロジェクトである「Electronic Library Initiative」¹¹⁰⁾ における、教員に対する授業支援の取り組みでの協働から発展したものである¹⁰³⁾。

Collaborative Learning Center は、参加部署の協働による様々な形での学習や教育に対する支援を Bass Library で展開している。教育に対する支援としては、教員や Collaborative Learning Center 参加部署のスタッフによる教育でのテクノロジー活用に関するレクチャーの開催、講義・課題・教授法などに関する教員に対するコンサルタントや授業支援が行われている。

Bass Library にある Collaborative Learning Center のサービスデスクでは、学部学生を対象とする学生による外国語のチュートリアル¹¹¹⁾ が行われている。その他、デジタルメディア機器の貸出も行われており、テクノロジー部署や図書館のスタッフによるビデオ編集やウェブ作成、画像編集に関するワークショップも開催されている^{103), 109)}。また、Bass Library のなかには、テクノロジー部

署による相談窓口も設けられている¹¹²⁾。

このような Bass Library における取り組みは、学内に対して様々な影響を与えている。Bass Library において試みられた、図書館スペースでの他部署との協働によるサービス提供という手法が、他の図書館でも採用されるようになっていく¹⁰³⁾。

d. 「Research Education Program」の取り組み

「Research Education Program」¹¹³⁾ は、学内の教育の中に図書館を位置づけ、現在の環境を踏まえた教育への貢献を行うためのプロジェクトである。各図書館に所属している図書館員・学芸員・アーキビストが参加しており、図書館におけるワークショップやインストラクション、オンライン・チュートリアル、個人に対する援助、授業でのインストラクションなどの提供が行われている¹¹³⁾。現在の「Research Education Program」で中心的な役割を果たしているのは、Director of Undergraduate and Library Research Education である。このポジションは2007年に設けられたものであり、そのオフィスは Bass Library に設置されている^{103), 113)}。

「Research Education Program」では、学部学生や学部教育に対する支援も重視されている。計画文書¹⁰⁸⁾では、全ての学部低学年の学生が図書館と情報資源の利用に関する基本的なスキルを習得するためのプログラムを計画し実行することを目標の1つとしてあげている。たとえば、English Department では、すべての専攻の1年生に対して図書館が開催するワークショップである「Library Research Sessions for English Majors」へ参加することを要求している。このワークショップの開催場所は、Bass Library となっている¹¹⁴⁾。2008年には、入学時に学部学生全員に対して担当図書館員をつける「Personal Librarian」¹¹⁵⁾という制度も開始されている。担当図書館員が、図書館や情報資源に関する質問の受付、課題に取り組む際の援助、関心を持つ分野のサブジェクト・ライブラリアンの紹介、メールでの情報発信などを行っている。30人ほどの図書館員が、学部学生に対してサービスを行っている。この「Personal

Librarian」は、イエール大学の Cushing/Whitney Medical Library が1996年に開始した制度であり、他の医学図書館でも参考にされている取り組みである。医学図書館での成功を受け、イエール大学では学部学生に対する応用が試みられている^{108), 116)}。

学部教育に対するより直接的な関与も試みられている。学部教育に対する支援の一環として、学部教育における一次資料（一次史料）を活用した授業への支援が行われている。たとえば、学部教育課程の人文科学分野の授業において、教員と協働しながら図書館員とアーキビストがイエール大学の所蔵する一次資料コレクションなどを活用して、学生の能動的な学習を促す授業や課題を設計する取り組みが行われている¹¹⁷⁾。具体的な事例としては、授業における図書館の主題別ガイド^{118), 119)}や電子展示¹²⁰⁾の作成、初年次セミナーにおける一次資料を利用したレポート作成が、学部教育に関するものとしてあげられる¹¹⁷⁾。このような一次資料などを利用した「探求に基づく学習」のための授業が、学生の授業への参加の促進、高いレベルの批判的思考能力の養成にとって有効であるとされている¹¹⁷⁾。

B. 新設された学部学生用図書館の事例

1990年代に新たに学部学生用図書館を設立したのは、1994年の南カリフォルニア大学 (Leavey Library)、1995年のジョージ・メイソン大学 (Johnson Center Library)、1997年のウェイン州立大学 (David Adamany Undergraduate Library) である。本節では、南カリフォルニア大学とウェイン州立大学の事例を述べる。なお、ジョージ・メイソン大学の Johnson Center Library に関しては、次節以降で触れる。

1. 南カリフォルニア大学 Leavey Library¹²¹⁾

a. 概要

南カリフォルニア大学には、University of Southern California Libraries という図書館システムがあり、学部学生用図書館の Leavey Library (1994年設立)も所属している¹²²⁾。Leavey Library

は、1962年に中央館の一画に設立された College Library (後に College Commons へ改称) を前身として設立された^{14), 123)}。ライティング・プログラムを含む一般教育を支援するための人文科学・社会科学・自然科学分野のコア・コレクション、マルチメディア資料などを所蔵している。

b. 1994年の設立とその背景

(1) 設立の背景

Leavey Library 設立の計画は、1985年に南カリフォルニア大学が所属する大学協会での基準認定のために、図書館を含む学内の学術関係の全部門が参加して行われた自己点検 (self study) において、学部教育の改善、それに対する図書館の支援が求められたことによって開始された¹²³⁾。このように、Leavey Library の設立には、学内における学部教育改善の動きが大きな影響を与えていた。しかし、それ以外にも、中央館の狭隘化問題を解決するためという古典的な理由も存在していた¹⁴⁾。

(2) 設立構想

Leavey Library は、構想の段階で「ティーチング・ライブラリー」の概念を取り入れていた点に特徴がある^{14), 123), 124)}。第II章でも述べたように、「ティーチング・ライブラリー」とは、文献利用指導を中核的サービスにとらえ、図書館が大学における学習・教育・研究などの諸活動に対して積極的かつ直接的に関わり、大学のミッションへの貢献を目指すことを示す概念として考えられたものである^{28), 29)}。

南カリフォルニア大学では、Leavey Library の構想の初期段階から、学術コミュニケーションが紙媒体主体、テキスト中心のモデルからデジタル、マルチメディア主体へと移行しつつあることを念頭においていた。このような移行に対応するために、図書館が学生や教員に対して新しいテクノロジーの活用を教える役割を担うことが考えられていた¹²³⁾。そのため、「ティーチング・ライブラリー」の概念が重要な位置を占めたわけであり、構想の段階からその教育的な役割が重視されていたといえる。さらに、第II章でも述べたように、1990年には Tompkins が新たな時代

にあわせた「ティーチング・ライブラリー」の概念を述べている。Tompkins は、学習モデルが能動的で統合的なものへ変化していること、そのなかで情報リテラシーが重要になっていることを背景に、「ティーチング・ライブラリー」を学部学生用図書館や研究大学の図書館にとっての重要な概念であるとしていた³²⁾。Tompkins は南カリフォルニア大学の Deputy University Librarian / Associate Dean of Libraries として活動していた時期がある。Tompkins が掲げた新たな時代にあわせた「ティーチング・ライブラリー」の概念は、Leavey Library の構想を進めるなかで考え出されたものであった^{32), 123)}。

このように、「ティーチング・ライブラリー」の概念を取り入れて構想された Leavey Library は、新たな学部学生用図書館の概念を体現するものでもあった。第III章でも述べたように、Leavey Library はハーバード大学の College Library とともに、Wilson が学部学生用図書館の新たな概念として採用することを提唱した、「ゲートウェイ・ライブラリー」概念において重要な役割を果たしている。Wilson によると、設立前に定められた Leavey Library のミッションは“学部教育課程と大学院教育課程を支援し、向上させるような、図書館と情報資源の入口 (gateway) を提供すること”⁴¹⁾であった。さらに当時 University Librarian であった Lyman が Leavey Library は入口としての図書館 (gateway library) を意図しているものであると述べていた⁴¹⁾。

以上のような構想を経て、Leavey Library は1994年に設立された。設立直後の文献では、Leavey Library がテクノロジーの導入、学生に対する情報リテラシー教育、教育でのテクノロジー活用を重視した図書館であると述べられている¹²⁴⁾。そして、Leavey Library の図書館員によって成文化されたビジョンは、“1) 学部学生の知的な生活のための中心としてサービスを行うこと、2) 教育課程におけるサービスと情報テクノロジーの実験場所としての役割を果たすこと、3) 従来の学部教育の概念を超え、学生や教員と知識の世界の間の相互作用を促進する概念と場所であること”¹²³⁾

であった。

(3) 先進的なサービスの導入

Leavey Library の最も注目すべき点は、1994 年の設立の段階でインフォメーション・コモنزを導入したことであり、その早期例、代表例としても有名である。南カリフォルニア大学の図書館員による事例報告においても、インフォメーション・コモنزは、“図書館の建物とサービスの最も革新的で独創的な側面”³⁾、“Leavey Library の中心”¹²⁵⁾と表現され、重要な要素として位置づけられている。インフォメーション・コモنزには、1994 年の段階で 100 台近くのコンピュータが設置され、グループ学習室、コンピュータが設置された教室、大講義室なども配置されていた^{3), 123), 124)}。この構成は、現在の大学図書館の潮流を先取りするものであったと考えられる。さらに、インフォメーション・コモنزでは 1 台のコンピュータをグループでも利用できるようにスペースを設計しており、グループ学習室でもネットワーク環境が利用できるようになっていた^{123), 124)}。このように、当初からテクノロジーを活用した協働的な作業への支援が考えられていたことが分かる。

インフォメーション・コモنزは、図書館のサービス提供体制における新たな試みが行われた場所でもあった。Leavey Library は、キャンパスにおいて唯一、さらにアメリカ国内においても少数であった、コンピュータと図書館の援助の集中化を試みている図書館¹²³⁾であった点が、当時において革新的であったといえる。

Leavey Library では、テクノロジーの図書館への導入が重視されるとともに、テクノロジーを活用するためのインストラクションも重視されていた。すでに述べたように、構想の段階から、Leavey Library では教育的な役割を担うことが期待されていたが、設立計画が開始された 1980 年代半ばと比べて、Leavey Library が設立された 1990 年代半ばになると教育的な役割の重要性はさらに増していたといえる。1990 年代はインターネットの利用が広まりつつあった時代であったため、それに対応する形でインターネットを教

育や研究で活用するための講座も Leavey Library において開催されていた。この講座は、図書館とテクノロジー部署が協力して行っていたものであり、図書館側からは Leavey Library の図書館員、中央館である Doheny Library のレファレンス部門の図書館員が参加していた。内容としては、入門的あるいは上級のな研究や授業におけるインターネットの活用方法、ソフトウェアの利用方法などが扱われていた^{123), 124)}。さらに、授業関連のインストラクションも行われており、Leavey Library ではライティング・プログラムや人文科学・社会科学分野の学部教育課程の授業においてインストラクションを行っていた。当時の南カリフォルニア大学では、ライティング・プログラムに情報リテラシーを主要な要素として組み入れることが試みられていた。そのため、Leavey Library やコンピュータ部署もライティング・プログラム担当教員に協力し、情報リテラシー導入に取り組んでいた¹²³⁾。

以上のような教育的な役割とともに、教育を改革するための実験場所としての役割も Leavey Library は担っていた。グループ学習室は教育において新しいテクノロジーを活用するための教員の実験場所としても利用され、そこでは人類学・西洋文明・映像・美術・音楽の分野において、マルチメディアやコンピュータを利用した授業が行われていた^{123), 124)}。さらに、Leavey Library は 1995 年に開始された電子リザーブ・プログラムの試験施行を行う場所でもあった¹²³⁾。

c. 現在の Leavey Library

(1) サービスの拡張

Leavey Library では、設立後もサービスのさらなる拡張を行っている。1994 年の段階ではインフォメーション・コモنزは地階部分にのみ設置されていた。1998 年になると、コンピュータへのより多くの要求、および、より協働的な作業室に対する学生の要求に応えるために、2 階に新たなインフォメーション・コモنزが設置されている³⁾。そして、当初は地階にのみ配置されていたグループ学習室も 2 階に増設されている。1 階にはマルチメディア・コモنزも設置され、マル

チメディア・コンテンツ（グラフィックやオーディオ、ビデオ）を作成できる機器が利用できるようになっている¹²⁶⁾。また、設立当初からあった場所にも、新たな設備が導入されている。コンピュータ教室と大講義室にはパーソナル・レスポンス・システムが導入され³⁾、グループ学習室のなかにはビデオ会議室として利用できる部屋もある¹²⁷⁾。

設備の増設だけでなく、ビデオカメラやカメラ、オーディオレコーダーといった機器の貸出も行われるようになってきている¹²⁷⁾。

(2) 他部署との協働

Leavey Library では、構想段階や設立直後から他部署との協働が行われていた。現在でもそれは引き続いており、Leavey Library の教育目標を達成するために他部署との協働は重要なものとして位置づけられている。一般教育プログラム、ライティング・プログラム、ファカルティ・ディベロップメントを担当する Center for Excellence in Teaching, テクノロジー部署の一部門である Center for Scholarly Technology, 学習や学生生活の支援担当である Center for Academic Support の障害を持つ学生に対する支援プログラムとの協力が行われている¹²⁸⁾。

現在のインフォメーション・コモンズでは、当初から行われている図書館とコンピュータ部署による援助とともに、ライティング・センターとの協力により、ライティングのコンサルタントも行われている¹²⁹⁾。コース・マネージメント・システムの管理、学習と教育におけるテクノロジー利用のための業務を担当している Center for Scholarly Technology のオフィスは Leavey Library のなかであり、当初より Leavey Library との協力が行われていた¹²³⁾。現在でも、新しいプロジェクトを行う際に、Leavey Library はその実験場所として利用されている¹²⁸⁾。

2. ウェイン州立大学 David Adamany Undergraduate Library¹³⁰⁾

a. 概要

ウェイン州立大学には、Wayne State University

Library System という図書館システムがあり、学部学生用図書館である David Adamany Undergraduate Library (1997年設立) も所属している¹³¹⁾。David Adamany Undergraduate Library は、学部教育課程の入門レベルと初級レベルの授業を支援するためのコレクション、マルチメディア資料を所蔵している。また、アメリカにおいて最も新しい独立した建物の学部学生用図書館でもある。

b. 1997年の設立とその背景

(1) 設立の背景と構想

ウェイン州立大学における学部学生用図書館設立の動きは、1970年代に遡るものである。ウェイン州立大学では、1970年の時点で中央館を学部学生用図書館へ転換するという計画が存在していたが、その計画が進展を見せないまま頓挫したという経緯があった¹⁸⁾。

その後、現在の David Adamany Undergraduate Library 設立のための計画が1986年に開始された。ウェイン州立大学では学部学生の学習に貢献するための取り組みに力を入れており、学部学生のための図書館を学生募集やリテンションのための有力なツールになると見なしていたという事情が背景にあった¹³²⁾。計画の段階から、大学での学部学生に対する取り組みのなかに位置づけられていたといえる。

大学への貢献を目指すという方向性は、設立時のミッション・ステートメントからもうかがえる。David Adamany Undergraduate Library のミッション・ステートメントでは、学生が学業上の成功や情報リテラシー能力獲得に必要なスキルを習得できる機会、大学の教育機能を高める環境を提供することなどが述べられている。当時のウェイン州立大学は戦略計画のなかで学生の成功を目標にあげており、David Adamany Undergraduate Library はそれに貢献できることを目指していたといえる。さらに、大規模な研究大学の一部門として、David Adamany Undergraduate Library が学内の他の図書館への入口 (gateway) としての機能を持つことも、ミッション・ステートメントのなかで述べられていた^{132), 133)}。南カリフォルニア

ア大学 Leavey Library と同様、当初から入口としての図書館という役割を担っていたといえる。

David Adamany Undergraduate Library は大学の新たな潮流に対応することを目指していた図書館であった。設立時より、協働的な学習、「資料に基づく学習 (resource-based learning)」などの新しい学習形態が念頭に置かれ、さらに、教育課程と結び付いた図書館サービスに対する志向が顕著だった点¹³²⁾が特徴であったといえる。

さらに、これらとは別の側面も、設立を促した要素となっていると考えられる。David Adamany Undergraduate Library には保存書庫が設置されており、このことから資料スペース問題の解決策という面もあったと考えられる。また、David Adamany Undergraduate Library の設立後、対象とする分野が重なっている中央館と科学図書館において、大学院生と研究を支援する方向性がより強まったとされており¹³²⁾、サービス対象の明確化と多さの緩和という面もあったと考えられる。

(2) 設立時のサービス

David Adamany Undergraduate Library は、既に電子資料が重要性を増していた時期に設立された図書館であったため、当初より紙媒体の資料とともに電子資料 (CD-ROM やオンライン資料) が重視されていた点に特徴があった。これを反映して、David Adamany Undergraduate Library の資料収容可能冊数は、典型的な学部学生用図書館の収容可能冊数の半分程度であった^{132), 133)}。

資料の収容可能冊数を少なくしたかわりに、コンピュータ利用や学習のためのスペースを重視した設計が行われていた。設立時に、600 台のコンピュータが用意され、1400 箇所ネットワーク接続ができるようになっていた。学生の協働作業が行えるスペースへの要求、教育における協働的な学習の重視といった傾向に対応する形で、グループ学習室 (32 室) や会議室が用意されていた。そして、教育課程と結び付いた図書館という概念を実現するために、コンピュータ教室 (3 室)、マルチメディア・コンテンツ作成用の教室、大講義室、24 時間利用可能な学習室 (24-Hour Extended Study Center) が設置されていた。その

他、アトリウムも設置され、学内者の発表の場、学生が芸術に親しむ場として、ダンスや音楽、演劇を専攻する学内者、朗読クラスの受講者によるパフォーマンスなどが行われていた^{132), 133)}。

教育課程と結び付いた図書館という概念は、設備以外の部分にも現れていた。当時、ウェイン州立大学では、1 年生の必修科目として「Information Power: the University and its Libraries」という授業が開講されていた。この授業では David Adamany Undergraduate Library の図書館員による講義も行われており、授業のためのオフィスも David Adamany Undergraduate Library のなかに設置されていた¹³²⁾。ファカルティ・ディベロップメントなどを担当する Office for Teaching and Learning¹³⁴⁾ も当初は Adamany Undergraduate Library にオフィスを構えていた (現在は中央館に移転している)^{132)~134)}。

c. 現在の David Adamany Undergraduate Library

現在の David Adamany Undergraduate Library は、その機能を強化する方向でサービスの拡張が行われており、他部署のサービスポイントやオフィスも設置されている。たとえば、College of Liberal Arts and Sciences が運営する Wayne State Writing Center¹³⁵⁾ は、当初は別の建物にある施設であった。しかし、その建物が別の用途に利用されることになった際に、互いの目標が近いという理由から、David Adamany Undergraduate Library のなかに移転されている¹³³⁾。さらに、学長のイニシアチブによって設立された Academic Success Center¹³⁶⁾ も、David Adamany Undergraduate Library のなかにある。Academic Success Center は、学部学生が自己決定能力と動機を持つ自立した学習者になるための支援を行うものであり、チュートリアル、スタディスキル習得のためのコンサルタントやワークショップ、Supplemental Instruction (授業時間外に、授業での学習を支援するためのグループ・セッション)などを担当している^{133), 136)}。さらに、ウェイン州立大学には、選抜された学部学生が受講することのできる Honors Program があり、そのオフィスも David Adamany Undergraduate Library 内にあ

る¹³⁷⁾。Honors Program に対するリエゾンも David Adamany Undergraduate Library の図書館員が担当している¹³⁸⁾。

ウェイン州立大学では、いわゆるコンピュータ・センター機能を図書館が担っている点も特徴である。以前はテクノロジー部署が学生用のコンピュータ・センターを運営していたが、David Adamany Undergraduate Library 設立後にそのコンピュータ・センターは閉鎖されている¹³²⁾。現在でも、学生が利用するコンピュータの提供場所は図書館が中心となっている¹³⁹⁾。

初年次教育に対する取り組みも行われている。現在のウェイン州立大学の図書館では、初年次教育向けの取り組みとして、授業でのインストラクション、1年生向けのウェブサイトの提供が行われている。図書館員による1年生向けの各科目内でのインストラクションは、授業で取り組む研究プロジェクトやレポート作成のための情報リテラシー教育を目的とするものであり、David Adamany Undergraduate Library の図書館員が受付窓口を担当している¹⁴⁰⁾。また、図書館の主題別ガイドのなかに、1年生向けの「First Year Students @ Wayne」¹⁴¹⁾も構築されている。

C. 1990年代以降の学部学生用図書館の傾向

1990年代以降の学部学生用図書館では、1) サービス面での変化として、a) サービスの集約化、b) 教育への関与の強まり、c) 学生の学習成果への関与が見られた。そして、2) 実施体制面での変化として、a) 図書館システム内での協働、b) 教員や他部署との協働が見られた。

1. サービスの変化

a. サービスの集約化

学部学生用図書館において、学部学生や学部教育向けの様々なサービスの集約化が行われている。本研究で調査対象とした23大学全てにおいて、(1) 図書館スペースへのテクノロジーの導入、(2) 様々な学習形態にあわせた学習スペースの整備、(3) 学習相談の場の設置が行われ、様々なサービスが同じ建物あるいはフロアにおいて集

約的に提供されていた。なお、中央館、学生・学部教育用施設のなかに学部学生用図書館を設けている大学では、学部学生用図書館以外のスペースで上記のようなものが提供されている場合もあるが、利用者にとっての集約性は同様であるといえる。

(1) 図書館スペースへのテクノロジーの導入

1990年代以降の学部学生用図書館では、コンピュータやネットワーク環境の整備、コンピュータが利用できる学習スペースや教室が設置され、図書館スペースへのテクノロジーの導入が進んだ。そして、それらを活用するための援助も図書館内で行われるようになり、サービスデスクでコンピュータ利用に関する人的援助が行われている。コンピュータの利用援助に関しては、テクノロジー部署によるサービスである場合が多く、学生の活用も目立つ分野である。さらに、最近では双方向的なやりとり、協働的な作業が行える機器やアプリケーションが、図書館内の教室やグループ学習室において利用できるようになっている大学もある。また、図書館において、ノートパソコンやデジタルメディア機器の貸出も行われるようになっている。

(2) 様々な学習形態にあわせた学習スペースの整備

個人学習、グループ学習、プレゼンテーション練習、コンテンツ作成など様々な学習形態に対応し、多様な学習スペースの提供も行われている。レポート作成や自習といった個人学習のためには、従来から提供されてきた静かな環境で学習ができるスペースの他、個人でコンピュータやネットワーク環境が利用できるスペースも提供されている。グループ学習室では、コンピュータやネットワーク環境に加え、グループで文書などを編集できるアプリケーションが利用できる大学もある。また、グループ学習室などにおいて、用途にあわせて机や椅子、ホワイトボードといった設備の配置が簡単に変更できる設計も近年の潮流となっている。さらに、グループ学習室やセミナー室でビデオ会議が行える場合もある。プレゼンテーション練習用のスペースを設けている図書館

もあり、そこでは、練習が行えるだけでなく、プレゼンテーション風景の録画もできるようになっている。そして、コンテンツ作成のためのスペースでは、様々な機器が用意されており、画像や映像、オーディオなどの多様なデジタル・コンテンツの作成が可能である。

(3) 学習相談の場の設置

学習相談の場も設置されている。図書館のサービスデスクでは、図書館資料や情報の利用に関連する事柄に関して、レポートや研究プロジェクトに取り組んでいる学生に対する図書館員による一対一の援助が行われている。また、学生によるピア・サポートが行われている場合もある。学部学生用図書館では、レファレンスも学生の学習上の課題を解決するための支援や手助けという性格が強くなっている。

たとえば、パデュー大学の John W. Hicks Undergraduate Library では、学部学生を対象とした一対一の援助である「Research Project Advisory Service」¹⁴²⁾が行われている。ミシガン大学の Shapiro Undergraduate Library では、学生によるピア・サポートである「Peer Information Counseling」¹⁴³⁾が実施されている。

さらに、学部学生を対象とする、ライティング指導やチュートリアルなどの相談窓口を設ける大学も存在する。ワシントン大学⁹⁸⁾やイェール大学¹¹¹⁾のように、それらの支援を学生が担っている場合もある。

以上のようなサービスデスクなどにおける対面での相談受付だけでなく、オンライン上での相談受付も行われている。その代表である電子レファレンス・サービスについては、学部学生用図書館のウェブサイトにもそれへのリンクが設定されていることも多いが、これは、学部学生用図書館によるサービスというよりも、図書館システム全体によるサービスである。その他、学部学生に対して担当図書館員をつけ、その図書館員がメールでの相談窓口や情報発信者になる制度を設けている大学もある。イェール大学の「Personal Librarian」制度では、学生1人1人に担当図書館員を割り振っており、シカゴ大学の「Class Librarians」制

度^{144),145)}では学年ごとに担当図書館員が配置されている。両大学とも、担当図書館員制度に各図書館の図書館員が参加しており、図書館システムとしての取り組みであるといえる。

(4) さらなる集約化の方向

さらなる集約化の方向も現れており、サービスの集約化の志向が強いといえるインフォメーション・コモンズ、ラーニング・コモンズを学部学生用図書館に導入する場合もある。本章A節とB節で扱ったワシントン大学と南カリフォルニア大学以外にも、それらを導入している大学がある。たとえば、インディアナ大学ブルーミントン校では、以前 Undergraduate Library という名称で運営されていたエリアであり、現在でも学部学生用コレクションや学部学生向けサービスが提供されている、Herman B. Wells Library (中央館)の West Tower にインフォメーション・コモンズが設置されている^{3),146)}。イリノイ大学アーバナ・シャンペーン校では、ラーニング・コモンズのモデルを採用して Undergraduate Library のリノベーションが行われている¹⁴⁷⁾。

学生・学部教育用施設のなかに学部学生用図書館を設置している大学もある。ジョージ・メイソン大学の Johnson Center Library¹⁴⁸⁾は、学習や教育、娯楽や生活のための施設が集まっている Johnson Center¹⁴⁹⁾(1995年建築)のなかにある図書館である¹⁵⁰⁾。さらに、シカゴ大学では、1970年に中央館が利用していた建物が学部教育用施設に転換され¹⁴⁾、学部教育部署や図書館による学部教育や学部学生向けの設備やサービスの提供が行われていた。この建物は2009年9月に現在のニーズにあわせるためのリノベーションが行われた。その際に図書館が管轄していたフロアは管轄外となり、名称も Harper Memorial Library から Harper Memorial Library Commons に変更されている¹⁵¹⁾。リノベーション時点では、Harper Memorial Library Commons において「College Librarians」という学部学生への支援サービスが行われていた¹⁵²⁾(ただし、本調査の2011年時点では実施が確認できない)。

b. 教育への関与の強まり

2009年時点で、全ての学部学生用図書館において学部教育課程への支援のための何らかのサービスが行われている。

学部学生用図書館のコレクションは、学部教育課程を支援するためのものが中心である。支援の対象として、リベラルアーツ分野や一般教育があげられていることが多い。リザーブ資料に関しても、これらの授業で使用されるものを所蔵していることが多い。さらに、電子リザーブ資料の提供も行われている。電子リザーブ資料の提供は、南カリフォルニア大学¹²³⁾やノースカロライナ大学チャペル・ヒル校¹⁵³⁾のように導入時に学部学生用図書館で試験運用を行ったところもあるが、現在は図書館システムとして提供されることが一般的である。さらに、電子リザーブの指定や提供がコース・マネジメント・システムをとおして行われることもある。

学部教育での情報リテラシーの重要性の増大にあわせて、授業内外での情報リテラシー習得を支援するサービスも行われている。学部学生用図書館では、リベラルアーツ分野や一般教育を対象としたインストラクションを行うとともに、入門的な情報リテラシーに関するインストラクションを担当していることが多い。図書館員による対面式のインストラクションは、授業や図書館において行われている。授業でのインストラクションは、授業ごとにカスタマイズされている。

オンライン上でのインストラクションも行われている。学部学生用図書館が担当あるいは関与しているのは、基本的な情報リテラシーに関するチュートリアルや学部学生用図書館がサービス対象とする授業の情報源に対するガイドであることが多い。たとえば、カリフォルニア大学ロサンゼルス校ではCollege Libraryが中心になって教員や学生と協働して、探索戦略、情報検索、情報の評価、引用の方法などに関する基礎的なチュートリアル¹⁵⁴⁾を作成している。その一方、ワシントン大学¹⁵⁵⁾など、基礎的なチュートリアルに図書館システムとして取り組んでいる大学もある。

現在では、一つの傾向として、教育への関与が

さらに強まりつつある。たとえば、教員に対する授業や課題の設計に関するコンサルタントが学部学生用図書館で行われることがある。さらには、本章A節とB節で述べた各大学での事例のように、教育におけるテクノロジーの活用、情報リテラシー教育の学部教育への導入、参加型の学習を取り入れた授業を広めるといった学部教育改革の取り組みに、学部学生用図書館や学部学生用図書館の図書館員が参加したり、中心的な役割を担うことがある。

c. 学生の学習成果への関与

学部学生の学習成果の表彰や成果物の展示といった、学習の学習成果に対する取り組みも行われるようになった。

図書館の資料や資源を利用した学部学生の研究プロジェクトを表彰する制度では、情報リテラシーや研究スキルを重視した評価が行われている。カリフォルニア大学バークレー校の事例はこの制度の嚆矢である⁷⁵⁾。ワシントン大学ではOdegaard Undergraduate Libraryに表彰制度のタスクフォースのオフィスがあり⁹⁷⁾、ウィスコンシン大学マディソン校では表彰制度がHelen C. White College Libraryによる開催となっている¹⁵⁶⁾。この2校は表彰制度への学部学生用図書館の関わりが強いといえる。

表彰制度に関しては、他部署との協働も見られる。カリフォルニア大学サンディエゴ校では学生支援部署¹⁵⁷⁾、ワシントン大学では学部教育部署との協働によって表彰制度が開催されている¹⁵⁵⁾。

学生によって生み出された成果物の展示も行われている。ハーバード大学Lamont Libraryでは、学内の表彰制度で受賞した学部学生の成果物を展示しており^{158), 159)}、ウィスコンシン大学マディソン校のHelen C. White College Libraryでは学部学生が作成した美術作品の展示が行われている¹⁶⁰⁾。

しかしながら、学生の学習成果への関与に含まれるサービスは、全ての大学で行われている訳ではない。2009年時点で、23大学中7大学でのみの実施が確認されている(第5表)。

第5表 学生の学習成果への関与に含まれるサービス実施大学

大学名	実施方法 ¹	内容 ²	
		学習成果の表彰制度	学習成果の展示
ウィスコンシン大学マディソン校	○	◎	◎
カリフォルニア大学サンディエゴ校	●	◎	
カリフォルニア大学バークレー校	●	◎	
カリフォルニア大学ロサンゼルス校	●	◎	
ニューヨーク州立大学バッファロー校	●	◎	
ハーバード大学	○		◎
ワシントン大学	○	◎	

¹ 学部学生用図書館による実施、あるいは関与が強いと判断した場合に「○」、図書館システムによる実施と判断した場合に「●」を記している。

² 実施を確認できた場合に、「◎」を記している。

2. 実施体制の変化

a. 図書館システム内での協働

第II章において、1990年代以降に「図書館システム全体による学部学生に対するサービス」という考え方が見られるようになったと述べたが、本研究の調査結果からも学部学生用図書館を設置している大学であっても、学部学生や学部教育に対するサービスを、学部学生用図書館が単独で担うわけではないと指摘できる。

たとえば、電子的サービスは図書館システムとしてのサービスであることが多い。本研究における調査対象大学の全てにおいて、電子資料や電子リザーブ資料、電子レファレンスが提供されているが、これらは図書館システムとしてのサービスであるといえる。また、オンライン・チュートリアルも学部学生用図書館が主体となって作成している大学もあるが、図書館システムのプロジェクトとして作成している大学もある。

さらに、本節1項で述べた「教育への関与の強まり」「学生の学習成果への関与」などは、図書館システムとして取り組まれている。たとえば、カリフォルニア大学バークレー校の「Mellon Library/Faculty Fellowship for Undergraduate Research」、ワシントン大学の「UWired」のような学内の教育改革への関与、イェール大学の「Research Education Program」、多くの大学で見られるリエゾン・サービスなどには、学内の様々な図書館員が参加して

おり、図書館システム全体としての取り組みである。この点で、学習と教育への支援・関与の強化が組織的に行われるようになってきているといえる。

b. 教員や他部署との協働

サービスの多くが教員や他部署との協力により行われている。テクノロジー部署との協働の例としては、1) コンピュータの提供や人的援助、2) テクノロジーを活用できる教室の設置、3) マルチメディア・コンテンツやデジタル・コンテンツ作成用の機器の提供や支援、4) コース・マネジメント・システムでのサービスがある。一方、学部教育部署との協働の例としては、1) 学部教育改革のための取り組み、2) 学部学生対象の表彰制度がある。ライティングやチュートリアルなどの部署と協働が行われることもある。

教員との協働の例としては、1) 授業におけるインストラクションやオンライン・ガイドの作成、2) オンライン・チュートリアルの作成、3) 授業や課題の設計がある。教員との協働による取り組みは、学生に対する支援であると同時に、教員に対する支援でもあるといえる。

現在の学部学生用図書館のリノベーションやサービスの変化は他部署との協働によってもたらされていることが多く、協働は重要な要素であるといえる。

3. 傾向のまとめ

調査対象である23大学における調査結果より、全ての大学の学部学生用図書館において、サービスの集約化（(1)図書館スペースへのテクノロジーの導入、(2)様々な学習形態にあわせた学習スペースの整備、(3)学習相談の場の設置）が行われており、さらなる集約化の試み（インフォメーション・commons、ラーニング・commons、学生・学部教育用施設との関わり）に取り組む大学も存在していることが分かった。さらに、学部教育課程への支援も全ての大学で行われていた。以上より、これらが現在の学部学生用図書館の中核的なサービスであるといえる。

そして、これらのサービスは学部学生用図書館単体というよりは、図書館システム内での協働、教員や他部署との協働によって実現されているという点も、全ての大学で見られる傾向であった。

ただし、サービスの方向性が同じであるとしても、その実際の提供に関しては大学ごとに異なる部分も見られた。たとえば、インフォメーション・commonsやラーニング・commonsを導入している大学もあるが、導入せずに異なる方法で同じような方向性を持つサービスを提供する大学もある。また、学生の学習成果への関与も、全ての大学でなされているわけではない。

しかしながら、全体として、1990年代以降の学部学生用図書館は、同じような方向性のもとでサービスが行われていると指摘できる。

D. 学部学生用図書館のサービスの変化の背景

前節までに述べたような、学部学生用図書館のサービスの変化の背景に関して、文献と本研究の調査結果より、1)テクノロジーの発展と利用の広まり、2)学部教育の変化、3)学生の気質の変化が指摘できる。

1. テクノロジーの発展と利用の広まり

学部学生用図書館に関する既往文献で指摘されているとおり、学部学生用図書館で現在行われているサービスの背景には、テクノロジーの発展と利用の広まりがある。テクノロジーの変化の影響

は、コレクション・設備・サービスをはじめとする図書館の全範囲に及ぶものであった。

テクノロジーの発展と利用の広まりは、1990年代以降の事例やリノベーションにおいて特に重要な要素であるといえる。たとえば、1993年設立のカリフォルニア大学バークレー校の Teaching Library は、オンライン上でのデータベースやサービスの利用が増え、学生が研究のために図書館に来ることが徐々に減ってきた状況を背景に設立されたものである。1994年に開始されたワシントン大学の「UWired」は、教育へのテクノロジーの導入のための取り組みであった。

リノベーションでは、テクノロジーの発展に対応し、現在のニーズにあわせることがその動機の1つとなっている。たとえば、1949年に設立された最初の学部学生用図書館である、ハーバード大学の Lamont Library において1990年代にリノベーションが計画された背景にも、テクノロジーの発展とそれへの対応があった。そして、1990年代に学部学生用図書館を新設した南カリフォルニア大学、ウェイン州立大学、ジョージ・メイソン大学¹⁵⁰⁾では、当初よりテクノロジーの活用を念頭においていた。

2. 学部教育の変化

本調査で分析した各事例の背景には、参加型の学習や協働的な学習をとおして、学生のライティング能力や批判的思考能力、主体的態度の養成を行い、学生を主体的な学習者にすることに重点を置くようになった学部教育の変化もある。

カリフォルニア大学バークレー校で取り組まれている学部教育改革の取り組みと学部学生の研究プロジェクトの表彰制度は、カーネギー教育振興財団のボイヤー委員会が1998年に発表した『学部教育の再編』⁷³⁾で提言されている、「研究に基づく学習」、「探求に基づく学習」を学部教育のなかに取り入れるための取り組みである。イェール大学の学部教育における一次資料を活用した授業への支援に関する事例報告でも、『学部教育の再編』が背景として述べられている¹⁰³⁾。さらに、現在の大学図書館で情報リテラシー教育を行う際

の規範であるといえる、ACRLの「高等教育のための情報リテラシー能力基準」²⁾でも『学部教育の再編』が言及されている。

『学部教育の再編』は、研究を重視する研究大学において学部教育が軽視されがちであることを指摘し、そのような状況を変えるための研究大学の特性を生かした学部教育改善の方法を提言している。具体的には、「研究に基づく学習」を標準にし、初年次を「探求に基づく学習」で構成するとともにそれを高学年へも引き継ぐこと、学際的教育の実施、コミュニケーション・スキルの養成、情報テクノロジーの創造的な利用、コミュニティ意識の養成などが提言されている^{73), 161)~163)}。

また、大学教育では、知識を伝達するものとしてではなく、学習者が構築するものとしてとらえる学習観のもとで、教員と学生、学生同士のやりとりをとおして、学生の学習を促すという、新しい潮流が出てきている¹⁶⁴⁾。このような、学部教育における協働的な学習の重要性の増大も、サービスの変化の背景として存在する。

3. 学生の気質の変化

バーチャル環境やグループ作業を好むといった学生の気質の変化も、近年のサービスの変化の背景である。たとえば、南カリフォルニア大学の Leavey Libray において2つ目のインフォメーション・コモنزが設置された理由は、学生のコンピュータと協働的な作業スペースへの要求の増大であった³⁾。また、Lucas も学部学生の変化が学部学生用図書館の変化に影響を与えていることを指摘している⁴³⁾。

現在、学部学生の多くは、ネット世代、Y世代、ミレニアム世代、デジタル・ネイティブといった言葉で表現される年齢層に属している。Lippincott は、ネット世代の特徴として、1) マルチメディア環境に慣れている、2) 参考マニュアルなしで自分自身で物事を見つけ出す、3) グループで行動する、4) 同時に複数のことを行う点をあげている。そして、彼らの特性は伝統的な図書館環境の特性とは異なるものであると述べてい

る¹⁶⁵⁾。このようなサービス対象者である学部学生の気質の変化も、サービスの変化の重要な要素であるといえる。

V. 学部学生用図書館の役割と概念

A. 現在の学部学生用図書館の役割

前章における学部学生用図書館のサービスに関する現状調査の結果とその検討から、現在の学部学生用図書館には、1) リベラルアーツを中心とした図書館、2) 教育的役割、学習と教育を促進する役割、3) 入口としての役割、4) 新しいサービスを導入する場、という役割があることが明らかとなった。

1. リベラルアーツを中心とした図書館

学部学生用図書館は、リベラルアーツ分野、一般教育を中心に支援する図書館である。主なサービス対象者は学部学生であり、そのなかでもリベラルアーツ分野を専攻する学生を主たる対象、あるいは学部1・2年生を主たる対象と定めていることが多い。サービス対象の分野とレベルは、学部教育課程の人文科学・社会科学・自然科学、あるいは一般教育で扱う人文科学・社会科学・自然科学が中心である。インストラクションに関しても、リベラルアーツ分野や一般教育、初年次教育が中心である。

このリベラルアーツを中心に支援するという役割は、1970年代のWilkinson²⁰⁾も指摘しており、以前からの役割である。これは、第II章で述べたように、学部学生用図書館が、中央館からの機能分化を目的として形成された図書館であるためと考えられる。つまり、研究大学の中央館はリベラルアーツ分野を中心とする研究図書館であるため、学部学生用図書館の対象も自然にリベラルアーツ分野が中心となる。さらに、第III章でも述べたとおり、学部学生用図書館を設置する大学は、学部教育課程においてリベラルアーツ分野の割合が高い大学である。これも学部学生用図書館がリベラルアーツ分野を中心とする要因になっている。

2. 教育的役割，学習と教育を促進する役割

学部学生用図書館は，第Ⅱ章で述べた「ティーチング・ライブラリー」概念に示されているような，教育的役割，学習と教育を推進する役割も持っている。

1960年代から1970年代になると，学部学生用図書館では，図書館利用指導や文献利用指導，教育的役割が強調されるようになった¹⁴⁾。現在では，学部学生用図書館に関する既往文献でも指摘されているように，図書館利用指導や文献利用指導よりも範囲が広い，情報リテラシー教育への取り組みが行われており，教育的な役割は増しているといえる。

学習と教育を促進するサービスは，教育課程の内外において，多様多岐にわたっている。たとえば，1) 多様な学習形態にあわせた学習スペースや機器の提供，2) コンピュータや利用援助の提供，3) レポートや課題に対する援助，4) ライティングやチュートリアルのサービスの提供，5) 学生の学習成果の表彰制度や発表の場の提供などがある。さらに，学部教育改革への関与，授業や課題の設計などの，より深く学部教育に関わる事例も多くなっている。

教育的役割，学習と教育を促進する役割は，現在の学部学生用図書館の中心的な役割であるといえる。様々なサービスが学部学生用図書館のなかに集約されており，学習と教育の拠点としての役割を形成している。

3. 入口としての役割

学部学生用図書館が設立された時代は，それを設置した大学において学部学生に対する中央館の利用の制限が行われており，学部学生用図書館は，学部学生が自由に利用できる図書館として作られたものであった。しかし，現在は多くの場合，学部学生は学部学生用図書館以外の図書館を利用できるようになっている。そのため，学部学生用図書館の新たな役割や位置づけを求める必要があった。そのなかで，第Ⅱ章で述べた「ゲートウェイ・ライブラリー」概念は，学部学生用図書館の役割を明示的にしたものであったとい

える。1990年代に学部学生用図書館を新たに建設した，南カリフォルニア大学，ウェイン州立大学，ジョージ・メイソン大学¹⁵⁾では，当初より入口としての図書館という位置づけがなされていた。

現在の学部学生用図書館は，1) 膨大なコレクション，2) 複数の図書館が所属する複雑な図書館システム，3) 電子的なものも含む図書館サービスへと導く入口としての役割を持っている。さらには，4) 大学における学習と教育のための入口としても機能しているといえる。

4. 新しいサービスを導入する場

学部学生用図書館は，従来の研究大学の図書館とは異なる新しいタイプの図書館として生み出されたものであり¹⁶⁾，現在でも新しいサービスやアイデアが素早く取り入れられているといわれている^{40), 43)}。現在の学部学生用図書館は，新たなサービスの実験が行われる場所としても機能している。たとえば，1) コンピュータ教室の設置，2) サービスポイントの統合，3) 電子リザーブ資料の提供，4) 他部署との協働によるサービスなどを，学内で学部学生用図書館が最初あるいは早期に行った大学がある。

5. 学部学生用図書館の役割

本節であげた学部学生用図書館の役割は，ミッション・ステートメントにも現れている。2001年にリノベーションしたノースカロライナ大学チャペル・ヒル校のR.B. House Undergraduate Libraryでは，リノベーション後の新たなミッションを以下のようにしている¹⁶⁶⁾。

R.B. House Undergraduate Libraryの新しいミッションは，学生や教員，コミュニティのための知的な交差点を創造するために，他の図書館・学科・学内部署・組織・コミュニティと協働することである。この取り組みを助長するために，R.B. House Undergraduate Libraryは，ノースカロライナ大学の豊かで複雑な図書館システムへと学部学生を導くこ

と、情報化時代という新たな地へと導くために学部学生と教員に対して援助を行うこと、学部教育と学部学生の学習のための新たな試みの実験場所として機能することに尽力する。

他の大学でも学部学生用図書館は、「様々な学習形態にあわせたスペースや設備、情報リテラシー教育、その他のサービスの提供をとおして、学部教育と学部学生の学習を促進するもの」、「研究大学における複雑な図書館システムや電子的なものを含むサービスへと導くもの」、「新たな試みを導入する場所」とされている。これらが現在の学部学生用図書館の役割である。

学部学生用図書館が設立された当時の「学部学生と学部教育を中心とする図書館」という性格、1960年代から1970年代に強調されるようになった教育的役割の重要性は現在でも同じである。しかし、テクノロジーの発展といった環境の変化、サービス対象者である学部学生や彼らが受けている学部教育の変化に対応して、サービスの変化、役割の強化や拡大が起きている。

1990年代以降の学部学生用図書館に関する既往文献の議論の焦点は、1)テクノロジーの活用、2)バーチャル環境でのサービス、3)図書館スペースの再構成、4)情報リテラシー教育の効果的な実践、5)新たな学習と教育の潮流への対応、6)学部教育との関わり、7)他部署との連携、8)新たなサービスのモデルの模索であった。第IV章における学部学生用図書館の現状調査の結果にも、そのような取り組みの事例が含まれている。さらに、学部教育改革、学部学生の学習成果への支援・関与のための取り組みも行われ、学部教育と学部学生の学習においてより積極的な役割を果たすようになってきていることも指摘できる。学部学生用図書館は、学習と教育の拠点となっているといえる。それは、上位組織である図書館システムの目標に沿うものであり、学部学生用図書館の活動は図書館システムにおける取り組みのなかに組み込まれている。さらには、大学における学部教育と学部学生に対する新たな取り組みである、テ

クノロジーや新たな教授法を活用した教育、学生の積極的な学習、および、学生の学業と学生生活における成功の促進に貢献するためのものでもある。

B. 学部学生用図書館の概念の変化

本研究での議論を踏まえて、1990年代以降の学部学生用図書館の概念の変化、その概念の実現方法の変化について考察する。

1. 1990年代以降の学部学生用図書館の概念の変化

前節で述べたように、学部学生用図書館が設立された当時の「学部学生と学部教育を中心とする図書館」という性格、1960年代から1970年代に強調されるようになった教育的役割の重要性は現在でも同じである。しかし、現在の学部学生用図書館では、図書館を取り巻く環境、学部学生や学部教育の変化に対応する形で、サービスの変化や役割の強化・拡大が起きている。それを受けて、学部学生用図書館をどのように考えるのかという概念の部分に変化が見られるようになった。これが最も大きな変化であると考えられる。

第II章で述べたように、学部学生用図書館の概念は、初期の「物理的な存在としての学部学生用図書館」から、1960年代から1970年代をとおして「学部学生用図書館によるサービス」、特に「学部学生に対する人的支援」に変化していった。かなりの学部学生用図書館が既に閉鎖されていた1980年代後半になると、たとえ閉鎖されたとしても、学部学生用図書館で行われていた利用指導などのサービスが中央館において存続する形でその精神が残るとされ、それが新しい方向であると考えられるようになった¹⁴⁾。

1990年代になると、図書館における電子化の流れが学部学生用図書館に影響を与えるようになった。従来は物理的制約という問題があった大規模な研究大学の図書館システム全体によるサービス提供が、電子化によってその制約を乗り越え、現実のものになってきた。電子化によってもたらされた、研究大学の図書館における図書館シ

システム全体によるサービスの提供、サービスとコレクションの集中化という流れは、学部学生用図書館に対する考え方にも影響を与えたと考えられる。以前から述べられていた学部学生用図書館は存続しないだろうという考えがさらに強まった一方で、第IV章の調査結果からも指摘できるように、学部学生用図書館が現存する大学でも学部学生に対する図書館システム全体でのサービス提供が重視されるようになった。学部学生用図書館の概念は、「図書館システム全体による学部学生に対するサービス」へと変化した。

さらに現在では、図書館の枠を超えた、学部学生に対するサービスに焦点が置かれるようになってきている。つまり、「研究大学における学部学生に対するサービス」が関心の中心になりつつあるといえる。たとえば、既往文献でもたびたび指摘されてきた他部署との協働により成り立つインフォメーション・コモنزやラーニング・コモنزの設置はその一例である。さらに本研究の調査では、それらを設置しなくても他部署との協働によるサービスが行われ学部学生用図書館が学習と教育の拠点として機能する大学も多く存在すること、学部教育改革に図書館が関わる試みも行われていることが分かった。様々な形で、大学全体として学部学生に対するサービスを行う方向性が顕著になっているといえる。

以上のように、学部学生用図書館の概念は、初期の「物理的な存在としての学部学生用図書館」、1960年代から1970年代の「学部学生用図書館によるサービス（特に人的支援）」を経て、「図書館システム全体による学部学生に対するサービス」に変化した。さらに現在では、「研究大学における学部学生に対するサービス」へと変化した。図書館中心に考えるのではなく、研究大学で学ぶ学部学生という存在を中心に概念を考えるようになったといえる。

2. 学部学生用図書館の概念の実現方法の変化

学部学生用図書館の概念の変化のなかで、その概念の実現方法も変化している。初期の「物理的な存在としての学部学生用図書館」という概念の

実現を担うのは、他と区切られた施設としての学部学生用図書館であった。学部学生用図書館は、学部学生が重視されていない環境にある研究大学において、学部学生のためにより良いサービスを行い、彼らが利用しやすい環境を提供するためのものであった。学部学生用図書館の試みは研究大学の図書館における主流的なサービスとは異なるものであり³²⁾、学部学生用図書館の概念は革新的なものであったといえる。その後、学部学生用図書館が持つ特徴やそこで行われるサービスが、学部学生用図書館だけに限定されるものではないという方向に時代とともに変化してきた。第二章で述べたように、学部学生用図書館が重要な役割を果たしたサービス、先進的に導入したサービスは学部学生用図書館を超えて広まっていき、他の図書館でも提供されるサービスになっていった。特に、1960年代から1970年代以降の学部学生用図書館の概念において重視された、図書館利用指導や文献利用指導といった人的支援にそのような傾向が見られた。この際に、学部学生用図書館の存在意義に疑問が持たれるようになり、学部学生用図書館を閉鎖した大学も現れた。しかし、そのような場合でも、学部学生用図書館が実施していたサービスは引き継がれていき、学部学生用図書館が持っていた精神は残った。

これは1990年代以降でも同様である。学部学生用図書館を閉鎖した大学は、現在の学部学生用図書館のサービスの変化と同様の背景と目的のもとづき、学部学生用図書館を閉鎖している。たとえば、メリーランド大学では、現在の学部学生のニーズや学部教育の変化に対応するために、学部学生用図書館を閉鎖し中央館と統合するとともに学部学生に対するサービスを充実させている^{167), 168)}。カナダのブリティッシュ・コロンビア大学では、1997年に学部学生用図書館を閉鎖した後、1999年頃から中央図書館での学習スペースの拡充の検討を始め、2002年に学部学生を主対象とするラーニング・コモنزを設置し、2008年には中央図書館をラーニング・センターに改称している¹⁶⁹⁾。

一方、本研究の調査結果より、学部学生用図書

館を設置する大学であっても、学部学生や学部教育に対するサービスはそれのみが担うわけではないと指摘できる。特に電子的なサービスではそのような傾向が顕著であり、さらに近年では図書館システム全体で組織的に学習と教育への支援・関与を行う例も見られるようになった。

このように、学部学生用図書館の概念の実現は、学部学生用図書館だけではなく、他の図書館によっても担われるようになった。同時に、本節1項で述べたように、学部学生用図書館の概念にも、「学部学生用図書館によるサービス」から「図書館システム全体による学部学生に対するサービス」へという変化が見られた。

さらに、近年見られつつある、図書館を超えた「研究大学における学部学生に対するサービス」という概念への変化は、他部署との協働によって実現されている。アメリカでは、このような動向に集約 (convergence) という言葉が用いられるようになってきている。集約とは、学習・教育・研究の支援というミッションを共有し、それを実現するために様々な部署が協働してサービスを行うことである¹⁷⁰⁾。本研究の調査結果においても、新しい事例あるいは先進的と考えられる事例において、特にこのような傾向が顕著であった。これは、図書館の取り組みが大学全体の取り組みのなかに組み込まれるようになった、あるいは図書館が大学全体というなかに自らの存在を位置づけるようになった現れである。

学部学生用図書館は、学部学生が重視されない傾向にあった研究大学という環境のなかで、学部学生に対するより良いサービスを行うための手段の1つとして生み出されたものであった。最初の学部学生用図書館とされているハーバード大学の Lamont Library、さらには物理的に存在している学部学生用図書館は、研究大学において学部学生に対する図書館サービスを考えることのシンボルである。しかし、その概念は学部学生用図書館の枠を超えて図書館全体に広がっていき、さらに、現在では図書館を超えて他との協働も行いながら発展しているといえる。

C. 終わりに

1. 日本の大学図書館への示唆

学部学生用図書館は日本の大学図書館と似ている面があり、日本の大学図書館にとって参考になることが多いと考えられる。たとえば、研究志向の強い大学で学部学生に対する図書館サービスを行う存在である点、1980年代以降の学部教育改革という環境のなかで存在していた点など、現在の日本の大学と大学図書館の置かれた状況に似通っているといえる。そのため、現在の学部学生用図書館で行われているサービスや、それらが行われるようになった経緯・背景を検討することは、日本の大学図書館にとって大いに参考になる。ただし、アメリカの大学と図書館の制度自体は日本とは異なっており、またリノベーションや新たなプロジェクトの創設の際の資金に学外からの寄付が大きな割合を占めていることも日本とは異なる点である。したがって、アメリカの学部学生用図書館の取り組みをそのまま日本で行うことはできないが、現在の学部学生用図書館の検討をとおして、日本における大学図書館のサービスを考える際の示唆を得ることは可能である。

本研究での調査により、アメリカにおける学部学生用図書館にはかなり多様性があり、さらに研究大学における学部学生と学部教育へのサービスのための手段の1つとして位置づけられていることが分かった。また、それを設置している大学間でそのタイプや学部教育の特徴が類似しているため、現在の学部学生用図書館のサービスの方向性や目的もまた似通ったものとなっているが、その具体的な実施については様々であることも明らかとなった。学部学生に対するサービスは単一的なものではなく、その大学の状況に適したサービスを提供することが重要である。

さらに、本研究では、学部学生用図書館の概念が、図書館中心のものから、利用者である研究大学で学ぶ学部学生を中心とするものへと変化していることを指摘した。この利用者中心という発想は、今後の日本の大学図書館にとっても重要な視点になると考えられる。

2. 今後の研究の展開

本研究では、1990年代以降の学部学生用図書館の変化に関して、ウェブサイトと文献を利用した調査を行った。学部学生用図書館への理解を深めるためには、それに対する実地調査や図書館員へのインタビューなどに基づく分析を行う余地があると考えられる。また、学部学生用図書館の変化は学部教育の変化と密接な関わりを持っている。今後、アメリカにおける学部教育の動向と学部学生用図書館の変化の関係について、さらなる研究を行うことも必要であろう。

謝 辞

本論文は、慶應義塾大学大学院文学研究科図書館・情報学専攻情報資源管理分野に提出した2009年度修士論文をもとにしたものです。執筆にあたってご指導いただいた慶應義塾大学文学部の田村俊作教授に深く感謝いたします。さらに、査読者、編集委員の皆様からは、多くの貴重なご意見をいただきました。厚く御礼申し上げます。

注・引用文献

- 1) 野末俊比古. “大学図書館と情報リテラシー教育：「指導サービス」の意義と展開”. 変わりゆく大学図書館. 逸村裕, 竹内比呂也編. 勁草書房, 2005, p. 43-57.
- 2) Association of College and Research Libraries. Information Literacy Competency Standards for Higher Education. <http://www.ala.org/ala/mgrps/divs/acrl/standards/informationliteracycompetency.cfm>, (accessed 2011-06-05).
- 3) Bailey, D. Russell; Tierney, Barbara Gunther. Transforming Library Service Through Information Commons: Case Studies for the Digital Age. American Library Association, 2008, 155p.
- 4) From Information Commons to Learning Commons: Voices From the Frontline. <http://library.uncc.edu/infocommons/conference/minneapolis2005/>, (accessed 2011-06-05).
- 5) Bell, Stephen J.; Shank, John. The blended librarian: A blueprint for redefining the teaching and learning role of academic librarians. *College and Research Libraries News*. 2004, vol. 65, no. 7, p. 372-375.
- 6) 長澤多代. 情報リテラシー教育を担当する図書館員に求められる専門能力の一考察：米国のウェイン州立大学の図書館情報学プログラムが開講する

「図書館員のための教育方法論」の例をもとに、*大学図書館研究*. 2007, vol. 80, p. 79-91.

- 7) 竹内比呂也. 特集, デジタルコンテンツの進展と図書館：デジタルコンテンツの彼方に図書館の姿を求めて. *情報の科学と技術*. 2007, vol. 57, no. 9, p. 418-422.
- 8) 小島英治. 学習図書館理念の変遷と「学習図書館構想」のあり方. *中京大学図書館学紀要*. 1992, vol. 13, p. 17-31.
- 9) 川嶋太津夫. 大学教育の充実と大学図書館の役割：アメリカの大学図書館調査より. *大学教育研究*. 2001, no. 9, p. 31-40.
- 10) 土屋俊. 知識化社会における大学改革の中の大学図書館. *大学図書館研究*. 2001, vol. 60, p. 1-7.
- 11) 三浦逸雄. 大学改革と大学図書館の学習・教育支援機能：日米実態調査の結果と分析. 東京大学大学院教育学研究科図書館情報学研究室, 2005, 250p.
- 12) 吞海沙織, 溝上智恵子. 大学図書館における学習支援空間の変化：北米の学習図書館からラーニング・コモンズへ. *図書館界*. 2011, vol. 63, no. 1, p. 2-15.
- 13) 日本図書館情報学会用語辞典編集委員会. *図書館情報学用語辞典*. 第3版, 丸善, 2007, 286p.
- 14) Person, Roland Conrad. *A New Path: Undergraduate Libraries at United States and Canadian Universities, 1949-1987*. Greenwood Press, 1988, 160p.
- 15) Mills, Elizabeth. *The separate undergraduate library. College and Research Libraries*. 1968, vol. 29, no. 2, p. 144-156.
- 16) Braden, Irene A. *The Undergraduate Library*. American Library Association, 1970, 158p.
- 17) Haak, John R. Goal determination. *Library Journal*. 1971, vol. 96, no. 9, p. 1573-1578.
- 18) Keever, Ellen Hull. Reassessment of the undergraduate library: A personal critique. *The Southeastern Librarian*. 1973, vol. 23, no. 1, p. 24-30.
- 19) Wingate, Henry W. The undergraduate library: Is it obsolete?. *College and Research Libraries*. 1978, vol. 39, no. 1, p. 29-33.
- 20) Wilkinson, Billy. A screaming success as study halls. *Library Journal*. 1971, vol. 96, no. 9, p. 1567-1571.
- 21) Association of College and Research Libraries. The mission of a university undergraduate library: Model statement. *College and Research Libraries News*. 1979, vol. 40, no. 6, p. 317-319.
- 22) 江原武一. 現代アメリカの大学：ポスト大衆化をめざして. 玉川大学出版部, 1994, 294p.
- 23) 小山憲司. アメリカの大学図書館における利用教育の実際：1920, 30年代を中心に. *日本図書館情報学会誌*. 1999, vol. 45, no. 2, p. 61-73.
- 24) Metcalf, Keyes. To what extent must we segregate?

- College and Research Libraries. 1947, vol. 8, no. 4, p. 399-401.
- 25) Engle, Michael O. Forty-five years after Lamont: The university undergraduate library in the 1990s. *Library Trends*. 1995, vol. 44, no. 2, p. 368-386.
- 26) アメリカの大規模な大学では、キャンパス内の複数の図書館（中央館、機能別図書館、主題別図書館など）からなる、図書館システム（library system）という組織が構成されているのが一般的である。なお、図書館システムとは、“複数の図書館がサービス機能を拡大と充実を図るために有機的な協力関係を結んで作り上げた全体組織のこと。またはこうした有機的な協力関係を有する図書館群”¹³⁾ のことである。
- 27) Person, Roland, ed. University undergraduate libraries: Nearly extinct or continuing examples of evolution? a symposium. *The Journal of Academic Librarianship*. 1982, vol. 8, no. 1, p. 4-13.
- 28) Guskin, Alan E.; Stoffle, Carla J.; Boissé, Joseph A. The academic library as a teaching library: A role for the 1980s. *Library Trends*. 1979, vol. 28, no. 2, p. 281-296.
- 29) Stoffle, Carla J.; Guskin, Alan E.; Boissé, Joseph A. “Teaching, research, service: The academic library’s role”. *Increasing the Teaching Role of Academic Libraries*. Kirk, Thomas G., ed. Jossey-Bass, 1984, p. 3-14.
- 30) Stoffle, Carla J. A new library for the new undergraduate. *Library Journal*. 1990, vol. 115, no. 16, p. 47-51.
- 31) Boyer, Ernest L. アメリカの大学・カレッジ：大学教育改革への提言。改訂版，喜多村和之，館昭，伊藤彰浩訳。玉川大学出版部，1996，353p.
- 32) Tompkins, Philip. New structures for teaching libraries. *Library Administration & Management*. 1990, vol. 4, no. 2, p. 77-81.
- 33) Kautzman, Amy M. “Undergraduate library collection”. *Encyclopedia of Library and Information Science*. First update supplement. 2nd ed., Marcel Dekker, 2005, p. 376-382.
- 34) Buckland, Michael K. 図書館サービスの再構築：電子メディア時代へ向けての提言。高山正也，桂啓社訳。勁草書房，1994，129p.
- 35) Watson, Mark; Foote, Jody Bales; Person, Roland C. Twenty years of undergraduate libraries: Whence and whither? *College & Undergraduate Libraries*. 1996, vol. 3, no. 2, p. 11-25.
- 36) Association of College and Research Libraries. The mission of a university undergraduate library: Model statement. *College and Research Libraries News*. 1987, vol. 48, no. 9, p. 542-544.
- 37) Association of College and Research Libraries. Guidelines for university undergraduate libraries. *College and Research Libraries News*. 1997, vol. 58, no. 5, p. 330-333, 341.
- 38) Association of College and Research Libraries. Guidelines for University Library Services to Undergraduate Students. 2005. <http://www.ala.org/ala/mgrps/divs/acrl/standards/ulsundergraduate.cfm>, (accessed 2011-06-05).
- 39) The fate of the undergraduate library. *Library Journal*. 2000, vol. 125, no. 18, p. 38-41.
- 40) Norlin, Elaina. “Undergraduate libraries: Lifelong learning”. *Encyclopedia of Library and Information Science*. 2nd ed., Marcel Dekker, 2003, p. 2844-2849.
- 41) Wilson, Elizabeth A. “The gateway library: Rethinking undergraduate services”. *People Come First: User-Centered Academic Library Service*. Montanelli, Dale S.; Stenstrom, Patricia F., eds. American Library Association, 1999, p. 13-44.
- 42) Dowler, Lawrence. “Gateways to knowledge: A new direction for Harvard College Library”. *Gateways to Knowledge: The Role of Academic Libraries in Teaching, Learning, and Research*. Dowler, Lawrence, ed. MIT Press, 1997, p. 95-107.
- 43) Lucas, Kari. The undergraduate library and its librarians in the large research university: Responding to change to remain vital and relevant. *Advances in Librarianship*. 2006, vol. 30, p. 299-323.
- 44) Donald, Beagle. The Learning commons in historical context. *名古屋大学附属図書館研究年報*. 2008, no. 7, p. 15-24.
- 45) 野末俊比呂. “第5章 情報リテラシー”. *情報探索と情報利用*. 田村俊作編. 勁草書房, 2001, p. 229-278.
- 46) “Undergraduate Library Directory”. Undergraduate Librarians Discussion Group. <http://www.lib.unc.edu/ugli/directory.html>, (accessed 2011-06-05).
- 47) *UGLi Newsletter* は、Undergraduate Librarians Discussion Group のウェブサイトにてアーカイブがある。“UGLi News Archive”. Undergraduate Librarians Discussion Group. <http://www.lib.unc.edu/ugli/archive.html>, (accessed 2011-06-05).
- 48) The Carnegie Classification of Institutions of Higher Education. <http://classifications.carnegiefoundation.org/>, (accessed 2011-06-05).
- 49) “Member Libraries”. Association of Research Libraries. <http://www.arl.org/arl/membership/members.shtml>, (accessed 2011-06-05).
- 50) パデュー大学では、2009-2010年度のCollege of Liberal ArtsとCollege of Scienceの学部学生の総計が、全体の約30%となっている。“Purdue University Data Digest 2008-09”. Purdue University. http://www.purdue.edu/datadigest/pages/students/stu_sch_level.htm, (accessed 2011-06-05).
- 51) ハワード大学では、2009-2010年度の入学者のう

- ち, College of Arts and Sciences の学部学生が最も多い。Howard University. Facts 2010. <http://www.howard.edu/facts/>, (accessed 2011-06-05).
- 52) “Lamont Library”. Harvard College Library. <http://hcl.harvard.edu/libraries/lamont/>, (accessed 2011-06-05).
- 53) Harvard University Library. <http://hul.harvard.edu/>, (accessed 2011-06-05).
- 54) “About HCL”. Harvard College Library. http://hcl.harvard.edu/about_hcl/index.cfm, (accessed 2011-06-05).
- 55) Lee, Susan. Organizational change in the Harvard College Library: A continued struggle for redefinition and renewal. *The Journal of Academic Librarianship*. 1993, vol. 19, no. 4, p. 225–230.
- 56) De Gennaro, Richard. “Foreword”. *Gateways to Knowledge: The Role of Academic Libraries in Teaching, Learning, and Research*. Dowler, Lawrence, ed. MIT Press, 1997, p. vii–xi.
- 57) “History”. Lamont Library. <http://hcl.harvard.edu/libraries/lamont/history.cfm>, (accessed 2011-06-05).
- 58) “Collaborative Learning Space Opens in Lamont”. Harvard College Library. http://hcl.harvard.edu/news/articles/2009/collab_learning_space.cfm, (accessed 2011-06-05).
- 59) “Ask a Librarian”. Harvard College Library. <http://hcl.harvard.edu/research/ask/index.cfm>, (accessed 2011-06-05).
- 60) “Research Guides”. Harvard College Library. <http://hcl.harvard.edu/research/guides/>, (accessed 2011-06-05).
- 61) “Research Contacts and Library Liaisons”. Harvard College Library. <http://hcl.harvard.edu/research/contacts/>, (accessed 2011-06-05).
- 62) “Programs and Services for Instructors”. Harvard College Library. http://hcl.harvard.edu/research/for_instructors/index.cfm, (accessed 2011-06-05).
- 63) “Course Reserves”. Harvard College Library. <http://hcl.harvard.edu/info/reserves/>, (accessed 2011-06-05).
- 64) “Doe/Moffitt Libraries”. The Library—University of California, Berkeley. <http://www.lib.berkeley.edu/doemoff/>, (accessed 2011-06-05).
- 65) “Description of the UC Berkeley Libraries”. The Library—University of California, Berkeley. <http://www.lib.berkeley.edu/AboutLibrary/description.html>, (accessed 2011-06-05).
- 66) Maughan, Patricia Davitt. Assessing information literacy among undergraduates: A discussion of the literature and the University of California-Berkeley assessment experience. *College and Research Libraries*. 2001, vol. 62, no. 1, p. 71–85.
- 67) Meltzer, Ellen. “The Teaching Library: Rethinking library services”. *Technology in Libraries: Essays in Honor of Anne Grodzins Lipow*. Tennant, Roy ed. 2008, p. 27–35. <http://technilibraries.com/meltzer.pdf>, (accessed 2011-06-05).
- 68) “Contacts (liaisons), Academic Departments and Programs”. The Library—University of California, Berkeley. <http://www.lib.berkeley.edu/Help/liaisons.html>, (accessed 2011-06-05).
- 69) “Library Liaisons to Academic Support Units”. The Library—University of California, Berkeley. http://www.lib.berkeley.edu/Help/liais_support.html, (accessed 2011-06-05).
- 70) “Staff Directory, by unit”. The Library—University of California, Berkeley. <http://cluster4.lib.berkeley.edu:8080/LibraryStaff/search.viewunit.logic>, (accessed 2011-06-05).
- 71) Dupuis, Elizabeth A. Amplifying the educational role of librarians. *Research Library Issues*. 2009, no. 265, p. 9–14.
- 72) “Mellon Library/Faculty Fellowship for Undergraduate Research”. The Library—University of California, Berkeley. <http://www.lib.berkeley.edu/mellon/index.html>, (accessed 2011-06-05).
- 73) The Boyer Commission on Educating Undergraduates in the Research University. *Reinventing Undergraduate Education: A Blueprint for America’s Research Universities*. 1998, 46p. <http://naples.cc.sunysb.edu/Pres/boyer.nsf/>, (accessed 2011-06-05).
- 74) Mellon Library/Faculty Fellowship for Undergraduate Research のウェブサイト⁷²⁾に、課題とシラバスの例が掲載されている。
- 75) “Library Prize for Undergraduate Research”. The Library—University of California, Berkeley. <http://www.lib.berkeley.edu/researchprize/>, (accessed 2011-06-05).
- 76) Jones, Lynn. The rewards of research: Library prizes for undergraduate research. *College & Research Libraries News*. 2009, vol. 70, no. 6, p. 338–341.
- 77) Moffitt_Project. http://www.lib.berkeley.edu/wikis/Moffitt_Project/, (accessed 2011-06-05).
- 78) “Revitalize Moffitt Library”. The Library—University of California, Berkeley. <http://www.lib.berkeley.edu/give/moffitt.html>, (accessed 2011-06-05).
- 79) “Goal Statement”. Moffitt_Project. http://www.lib.berkeley.edu/wikis/Moffitt_Project/index.php?n=Main.GoalStatement, (accessed 2011-06-05).
- 80) “Odegaard Undergraduate Library”. University of Washington Libraries. <http://www.lib.washington.edu/ougl/>, (accessed 2011-06-05).
- 81) “Libraries & Hours”. University of Washington Libraries. <http://www.lib.washington.edu/about/hours/>, (accessed 2011-06-05).
- 82) “Odegaard Undergraduate Library Looks to the Future on its 25th Anniversary”. University of Washington Libraries. <http://www.lib.washington.edu/ougl/fun/25th/>, (accessed 2011-06-05).

- 83) Wilson, Lizabeth A. Building the user-centered library. RQ. 1995, vol. 34, no. 3, p. 297-302.
- 84) "UWired". University of Washington. <http://www.washington.edu/uwired/>, (accessed 2011-06-05).
- 85) Donovan, Mark; Macklin, Scott. One Size Doesn't Fit All: Designing Scalable, Client-Centered Support for Technology in Teaching. <http://net.educause.edu/ir/library/html/cnc9846/cnc9846.html>, (accessed 2011-06-05).
- 86) Wilson, Lizabeth A. Collaborate or die: Designing library space. ARL: A Bimonthly Report. 2002, no. 222. <http://www.arl.org/bm~doc/collabwash.pdf>, (accessed 2011-06-05).
- 87) Garrison, Anne; Walker, Paula; TerHaar, Linda; Munroe, Mary. ULS discusses new learning communities. College and Research Libraries News. 1997, vol. 58, no. 4, p. 242-243.
- 88) McKinstry, Jill; McCracken, Perter. Combining computing and reference desks in an undergraduate library: A brilliant innovation or a serious mistake? Portal: Libraries and the Academy. 2002, vol. 2, no. 3, p. 391-400.
- 89) McKinstry, Jill. Collaborating to create the right space for the right time. Resource Sharing and Information Networks. 2004, vol. 17, no. 1/2, p. 137-146.
- 90) "Learning & Scholarly Technologies". University of Washington. <http://www.washington.edu/lst/>, (accessed 2011-06-05).
- 91) Learning & Scholarly Technologies. "Technology Spaces". University of Washington. http://www.washington.edu/lst/technology_spaces, (accessed 2011-06-05).
- 92) Learning & Scholarly Technologies. "Workshops". University of Washington. <http://www.washington.edu/lst/workshops/>, (accessed 2011-06-05).
- 93) "GEN ST 199: The University Community". Freshman Interest Groups at the University of Washington. <http://fyp.washington.edu/figs/genst199.php>, (accessed 2011-06-05).
- 94) University of Washington Libraries. "GEN ST 199: Freshman Interest Groups (FIGs), Fall 2010". Subject and Class Guides. <http://guides.lib.washington.edu/figs>, (accessed 2011-06-05).
- 95) Undergraduate Research Program. "Research Exposed!: Approaches to Inquiry". University of Washington. <http://www.washington.edu/research/urp/courses/researchexposed/index.html>, (accessed 2011-06-05).
- 96) 法政大学図書館. 大学図書館はなにを目指すのか: サービス・学習支援・リエゾン. 2009, 28p. http://rose.lib.hosei.ac.jp/dspace/bitstream/10114/2681/1/roundtable_wayaku.pdf, (accessed 2011-06-05).
- 97) University of Washington Libraries. "Library Research Award for Undergraduates". Subject and Class Guides. <http://guides.lib.washington.edu/researchaward>, (accessed 2011-06-05).
- 98) Odegaard Writing & Research Center. <http://depts.washington.edu/owrc/>, (accessed 2011-06-05).
- 99) "Anne T. and Robert M. Bass Library". Yale University Library. <http://www.library.yale.edu/bass/index.html>, (accessed 2011-06-05).
- 100) "About the Library". Yale University Library. <http://www.library.yale.edu/about/>, (accessed 2011-06-05).
- 101) "Yale Dedicates the Anne T. and Robert M. Bass Library". Yale Tomorrow. <http://yaletomorrow.yale.edu/news/bassdedication.html>, (accessed 2011-06-05).
- 102) "Library opening delayed Last-minute setbacks push Cross Campus Library's debut back to October". Yale Daily News. <http://www.yaledailynews.com/news/2007/aug/31/library-opening-delayed/>, (accessed 2011-06-05).
- 103) Prochaska, Alice. "Libraries and convergence at Yale". Convergence and Collaboration of Campus Information Services. Hernon, Peter; Powell, Ronald R., eds. Libraries Unlimited, 2008, p. 151-161.
- 104) "Conference Program Abstracts". ACRL New England 2009 Annual Conference. <http://www.acrlnewengland.org/springconf09/abstracts.html>, (accessed 2011-06-05).
- 105) "An Age of Discovery: Distinctive Collections in the Digital Age, October 2009". Association of Research Libraries. <http://www.arl.org/resources/pubs/fallforumproceedings/forum09proceedings.shtml>, (accessed 2011-06-05).
- 106) Committee on Yale College Education. Report on Yale College Education. 2003, 85p. <http://www.yale.edu/cyce/report/cycereport.pdf>, (accessed 2011-06-05).
- 107) "Phase 2a Renovation Project Overview and Key Milestones". Yale University Library. <http://www.library.yale.edu/renovaxn/phase2a/overview.html>, (accessed 2010-1-27). 2011年2月28日現在、このサイトにはアクセスできなくなっているが、Internet Archive Wayback Machineより2007年11月2日時点でのサイトを閲覧できる。 <http://web.archive.org/web/20071102222817/http://www.library.yale.edu/renovaxn/phase2a/overview.html>, (accessed 2010-06-05).
- 108) Yale University Library. Yale University Library Research Education Plan. http://www.library.yale.edu/researcheducation/pdfs/Library_Research_Education_Plan.pdf, (accessed 2011-06-05).
- 109) Collaborative Learning Center. <http://clc.yale.edu/>, (accessed 2011-2-28).
- 110) "Electronic Library Initiatives". Yale University Library. <http://www.library.yale.edu/eli/>, (accessed 2011-06-05).
- 111) "Foreign Language Tutoring". Yale University Cen-

- ter for Language Study. <http://cls.yale.edu/foreign-language-tutoring>, (accessed 2011-06-05).
- 112) “Technology Troubleshooting Office”. Yale University. <http://www.yale.edu/its/stc/tto.html>, (accessed 2011-06-05).
- 113) “Library Research Education Program”. Yale University Library. <http://www.library.yale.edu/researcheducation/index.htm>, (accessed 2011-06-05).
- 114) “Library Research Sessions for English Majors”. Yale University Library. <http://www.library.yale.edu/humanities/english/englishform.html>, (accessed 2011-06-05).
- 115) “Personal Librarian Program”. Yale University Library. <http://www.library.yale.edu/pl/index.html>, (accessed 2011-06-05).
- 116) Yale University Research Education Newsletter. 2009, vol.1. http://www.library.yale.edu/researcheducation/pdfs/lre_feb09.pdf, (accessed 2011-06-05).
- 117) Rockenbach, Barbara. “Archives, Undergraduates, and Active Learning: Case Studies from Yale University Library”. Association of Research Libraries. <http://www.arl.org/bm~doc/mm09rockenbach.pps>, (accessed 2011-06-05).
- 118) 完成したガイドは以下のサイトで閲覧できる。“Urban Studies: The Mediated City”. Yale University Library Subject Guides. <http://guides.library.yale.edu/content.php?pid=26239&sid=189434>, (accessed 2011-06-05).
- 119) この授業での取り組みは、Collaborative Learning Center のウェブサイトでも紹介されている。“Faculty Spotlight”. Collaborative Learning Center. <http://clc.yale.edu/faculty-spotlight/>, (accessed 2011-06-05).
- 120) 学生による電子展示は以下のサイトで閲覧できる。Otherwise Engaged: Intellectuals, Politics, Education. <http://media4.its.yale.edu/students/sam/MSSA/index.html>, (accessed 2011-06-05).
- 121) “Leavey Library”. University of Southern California. <http://www.usc.edu/libraries/locations/leavey/>, (accessed 2011-06-05).
- 122) “USC Libraries”. University of Southern California. <http://www.usc.edu/libraries/locations/>, (accessed 2011-06-05).
- 123) Holmes-Wong, Deborah; Afifi, Marianne; Bahavar, Shahla; Liu, Xioyang. If you build it, they will come: Spaces, values, and services in the digital era. *Library Administration and Management*. 1997, vol. 11, no. 2, p. 74–85.
- 124) Commings, Karen. Inside the University of Southern California’s ‘cybrary’. *Computers in Libraries*. 1994, vol. 14, no. 10, p. 18–19.
- 125) Crockett, Charlotte; McDaniel, Sarah; Remy, Melanie. Integrating services in the information commons: Toward a holistic library and computing environment. *Library Administration & Management*. 2002, vol. 16, no. 4, p. 181–186.
- 126) “Multimedia Commons”. University of Southern California. <http://www.usc.edu/libraries/locations/leavey/mmc/>, (accessed 2011-06-05).
- 127) “Leavey Library Technology”. University of Southern California. <http://www.usc.edu/libraries/locations/leavey/technology/>, (accessed 2011-06-05).
- 128) “Leavey Library History”. University of Southern California. <http://www.usc.edu/libraries/locations/leavey/history/>, (accessed 2011-06-05).
- 129) “Information Commons at Leavey Library”. University of Southern California. <http://www.usc.edu/libraries/locations/leavey/ic/>, (accessed 2011-06-05).
- 130) “David Adamany Undergraduate Library”. Wayne State University Libraries. <http://www.lib.wayne.edu/info/maps/ugl.php>, (accessed 2011-06-05).
- 131) Wayne State University Libraries. <http://www.lib.wayne.edu/>, (accessed 2011-06-05).
- 132) Sutton, Lynn. Imaging learning spaces at Wayne State University’s new David Adamany Undergraduate Library. *Research Strategies*. 2000, vol. 17, no. 2/3, p. 139–146.
- 133) Pearson, Jeffrey W. Building a new undergraduate library collection. *College & Undergraduate Libraries*. 1999, vol. 6, no. 1, p. 33–45.
- 134) Wayne State University Office for Teaching and Learning. http://www.otl.wayne.edu/index_about.php, (accessed 2011-06-05).
- 135) “Wayne State Writing Center”. Wayne State University College of Liberal Arts and Sciences. <http://www.clas.wayne.edu/writing/>, (accessed 2011-3-6).
- 136) Academic Success Center. <http://www.success.wayne.edu/index.php>, (accessed 2011-06-05).
- 137) Wayne State University Irvin D. Reid Honors College. <http://honors.wayne.edu/index.php>, (accessed 2011-06-05).
- 138) “Librarian Liaisons”. Wayne State University Libraries. <http://www.lib.wayne.edu/info/staff/liaison.php>, (accessed 2011-06-05).
- 139) “Academic Computing Services.” Wayne State University Computing and Information Technology. <http://computing.wayne.edu/academic/index.php>, (accessed 2011-06-05).
- 140) “Library Instruction and Information Literacy”. Wayne State University Libraries. <http://www.lib.wayne.edu/services/instruction/faculty.php>, (accessed 2011-06-05).
- 141) “First Year Students @ Wayne”. WSU Libraries Guides. <http://guides.lib.wayne.edu/content.php?pid=>

- 94558&sid=1205860, (accessed 2011-06-05).
- 142) "One-on-One Research". Purdue University Libraries. <http://www.lib.purdue.edu/hsse/infopages/rpas.html>, (accessed 2011-06-05).
- 143) "Undergraduate Library: Peer Information Counseling". University of Michigan Library. <http://www.lib.umich.edu/shapiro-undergraduate-library/undergraduate-library-peer-information-counseling>, (accessed 2011-06-05).
- 144) University of Chicago Library. "Class Librarians". Library Guides. <http://guides.lib.uchicago.edu/classlibrarians>, (accessed 2011-06-05).
- 145) Starkey, Rebecca; Kern, Barbara. The class librarian: Putting a friendly face on library service. *College & Research Libraries News*. 2007, vol. 68, no. 7, p. 429-431.
- 146) "Information Commons Reference". Indiana University Libraries. <http://www.libraries.iub.edu/index.php?pageId=310>, (accessed 2011-06-05).
- 147) "Learning Commons". University Library at University of Illinois at Urbana-Champaign. <http://www.library.illinois.edu/ugl/lc/>, (accessed 2011-06-05).
- 148) "Johnson Center Library". University Libraries George Mason University. <http://library.gmu.edu/libinfo/jcl.html>, (accessed 2011-06-05).
- 149) George W. Johnson Center, George Mason University. <http://jcweb.gmu.edu/>, (accessed 2011-06-05).
- 150) Hurt, Charlene. "The Johnson Center Library at George Mason University". *Building Libraries for the 21st Century: The Shape of Information*. Webb, T. B., ed. McFarland, 2000, p. 83-104.
- 151) Harper Memorial Library Commons. <http://harperlibrarycommons.uchicago.edu/>, (accessed 2011-06-05).
- 152) "College Librarians at the Commons". The Class Librarians Library information for students in The College of the University of Chicago. <http://lib.typepad.com/classlibrarians/2010/01/college-librarians-at-the-commons.html>, (accessed 2011-06-05).
- 153) McGinnis, Leah G. Electronic reserves at the University of North Carolina: Milestones and challenges in implementing a new service. *Journal of Interlibrary Loan, Document Delivery & Information Supply*. 1999, vol. 9, no. 4, p. 73-85.
- 154) "Road to Research UCLA College Library". University of California, Los Angeles. <http://www.sscnet.ucla.edu/library/index.php>, (accessed 2011-06-05).
- 155) "UWill". University of Washington Libraries. <http://www.lib.washington.edu/ougl/instructors/uwill.html>, (accessed 2011-06-05).
- 156) "Undergraduate Research Awards". College Library, University of Wisconsin—Madison Libraries. <http://www.college.library.wisc.edu/resources/researchaward/>, (accessed 2011-06-05).
- 157) "Undergraduate Library Research Prize 2011". University of California, San Diego Libraries. <http://libraries.ucsd.edu/about/undergrad-prize-2011.html>, (accessed 2011-06-05).
- 158) "Exhibitions and Events". Harvard College Library. <http://hcl.harvard.edu/info/exhibitions/>, (accessed 2011-06-05).
- 159) "Glad You've Asked: 2009 Hoopes Prizes are coming to our shelves!". LNL: The Lamont News-List for undergraduates, from the librarians at Harvard. <http://lamontnews-list.blogspot.com/2009/09/glad-youve-asked-2009-hoopes-prizes-are.html>, (accessed 2011-4-22).
- 160) *Illumination: Journal of the Undergraduate Humanities at UW-Madison*. <http://www.illuminationjournal.com/>, (accessed 2011-06-05).
- 161) 杉谷祐美子. "学士課程教育に対するニーズと近年の教育改革". 学習者のニーズに対応するアメリカの挑戦. 現代アメリカ教育研究会編. 教育開発研究所, 2000, p. 195-218.
- 162) 江原武一. アメリカの学部教育の現状. *立命館高等教育研究*. 2006, no. 6, p. 59-70.
- 163) 中島(渡利)夏子. 米国の研究大学における1990年代以降の学士課程カリキュラムの特徴: 研究に基づく学習を重視するスタンフォード大学の事例から. *東北大学大学院教育学研究科研究年報*. 2008, vol. 57, no. 1, p. 173-189.
- 164) Johnson, David W.; Johnson, Roger T.; Smith Karl A. 学生参加型の大学授業: 協同学習への実践ガイド. 関田一彦監訳. 玉川大学出版部, 2001, 254p.
- 165) Lippincott, Joan K. "Net generation students and libraries". *Educating the Net Generation*. Oblinger, Diana G.; Oblinger, James L, eds. 2005. <http://www.educause.edu/Resources/EducatingtheNetGeneration/NetGenerationStudentsandLibrar/6067>, (accessed 2011-06-05).
- 166) "R.B. House Undergraduate Library History and Mission". University of North Carolina at Chapel Hill Library. http://www.lib.unc.edu/house/history_and_mission.html, (accessed 2011-06-05).
- 167) University of Maryland Libraries. *Undergraduate Library Services in 2010*. <http://www.lib.umd.edu/PUB/UGLibServ.html>, (accessed 2011-06-05).
- 168) 土屋祥子. 米大学図書館訪問記. *神戸大学附属図書館報*. 2000, vol. 10, no. 2. <http://www.lib.kobe-u.ac.jp/kanpo/10-2/10-2-6.html>, (accessed 2011-06-05).
- 169) 吞海沙織, 溝上智恵子. 北米の大学図書館における学習支援空間の歴史的変容: ブリティッシュ・コロンビア大学の事例から. *カナダ教育研究*. 2010, no. 8, p. 1-17.

要 旨

【目的】本研究の目的は、1990年代以降から現在までを中心とする、アメリカの学部学生用図書館のサービスと概念の変化の検討をとおして、学部学生用図書館の変遷を明らかにすることである。

【方法】まず、既往文献をもとに従来から指摘されている学部学生用図書館の変化を整理した。その後、2009年に学部学生用図書館を設置していた全23大学を対象とする現状調査を行った。調査方法は、ウェブサイトと文献を利用した文献調査とし、1990年代以降のサービスの内容と実施の背景（理由やプロセスなど）を調査した。顕著な変化があった4大学、学部学生用図書館を新設した2大学の事例を記述した後に、1990年代以降の学部学生用図書館の傾向、変化の背景をまとめた。最後に、既往文献の整理と本研究の調査結果をもとに、学部学生用図書館の概念の変化を検討した。

【結果】1990年代以降の学部学生用図書館において、1) サービス面での変化として、a) サービスの集約化、b) 教育への関与の強まり、c) 学生の学習成果への関与が見られ、2) 実施体制面での変化として、a) 図書館システム内での協働、b) 教員や他部署との協働が見られた。学部学生用図書館の概念は、従来の「研究大学における学部学生のための図書館とその図書館によるサービス」から「図書館システム全体による学部学生に対するサービス」に変化した。さらに現在では、図書館の枠を超え、「研究大学における学部学生に対するサービス」に変じつつある。この概念の変化は、図書館の取り組みが大学全体の取り組みのなかに組み込まれるようになった、あるいは図書館が大学全体というなかに自らの存在を位置づけるようになった現れであるといえる。

付録 2009年時点における学部学生用図書館設置大学（調査対象）の詳細

	大学名	図書館名 / 部門名	設置	カーネギー分類 ¹			ARL ²	学部学生用図書館の立地 ³
				大学のタイプ	学部教育の専攻のタイプ (リベラルアーツ専攻の割合)	学部教育の選抜度		
1	アリゾナ大学 ⁴ University of Arizona	Undergraduate Services Team	公	研究大学 (大変高い研究活動性)	Balanced arts & sciences/professions (41~59%)	選抜度が高い	○	中央館の一画かつ学生・学部教育用施設内
2	イェール大学 Yale University	Bass Library	私	研究大学 (大変高い研究活動性)	Arts & sciences focus (80%以上)	より選抜度が高い	○	独立建物
3	イリノイ大学アーバナ・シャンペーン校 University of Illinois at Urbana-Champaign	Undergraduate Library	公	研究大学 (大変高い研究活動性)	Balanced arts & sciences/professions (41~59%)	より選抜度が高い	○	独立建物
4	インディアナ大学ブルーミントン校 Indiana University-Bloomington	Information Commons / Undergraduate Services	公	研究大学 (大変高い研究活動性)	Balanced arts & sciences/professions (41~59%)	選抜度が高い	○	中央館の一画
5	ヴァージニア大学 University of Virginia	Clemons Library	公	研究大学 (大変高い研究活動性)	Arts & sciences plus professions (60~70%)	より選抜度が高い	○	独立建物
6	ウィスコンシン大学マディソン校 University of Wisconsin-Madison	Helen C. White College Library	公	研究大学 (大変高い研究活動性)	Arts & sciences plus professions (60~70%)	より選抜度が高い	○	独立建物
7	ウェイン州立大学 Wayne State University	David Adamany Undergraduate Library	公	研究大学 (大変高い研究活動性)	Professions plus arts & sciences (21~40%)	記載なし	○	独立建物
8	カリフォルニア大学サンディエゴ校 University of California, San Diego	Center for Library and Instructional Computing Services	公	研究大学 (大変高い研究活動性)	Arts & sciences plus professions (60~70%)	より選抜度が高い	○	独立建物
9	カリフォルニア大学バークレー校 University of California, Berkeley	Moffitt Library	公	研究大学 (大変高い研究活動性)	Arts & sciences focus (80%以上)	より選抜度が高い	○	独立建物
10	カリフォルニア大学ロサンゼルス校 University of California, Los Angeles	College Library	公	研究大学 (大変高い研究活動性)	Arts & sciences focus (80%以上)	より選抜度が高い	○	独立建物
11	コーネル大学 Cornell University	Uris Library	私	研究大学 (大変高い研究活動性)	Balanced arts & sciences/professions (41~59%)	より選抜度が高い	○	独立建物
12	コロンビア大学 Columbia University	Philip L. Milstein Family College Library	私	研究大学 (大変高い研究活動性)	Arts & sciences focus (80%以上)	より選抜度が高い	○	中央館の一画
13	シカゴ大学 ⁵ University of Chicago	Harper Memorial Library Commons	私	研究大学 (大変高い研究活動性)	Arts & sciences focus (80%以上)	より選抜度が高い	○	学生・学部教育用施設内
14	ジョージ・メイソン大学 George Mason University	Johnson Center Library	公	研究大学 (高い研究活動性)	Arts & sciences plus professions (60~70%)	選抜度が高い	×	学生・学部教育用施設内
15	ニューヨーク州立大学バッファロー校 ⁶ State University of New York at Buffalo	Oscar A. Silverman Undergraduate Library	公	研究大学 (大変高い研究活動性)	Arts & sciences plus professions (60~70%)	より選抜度が高い	○	他の図書館と同じ建物内
16	ノースウェスタン大学 Northwestern University	Core Collection / Core	私	研究大学 (大変高い研究活動性)	Arts & sciences plus professions (60~70%)	より選抜度が高い	○	中央館の一画
17	ノースカロライナ大学チャペル・ヒル校 University of North Carolina at Chapel Hill	R. B. House Undergraduate Library	公	研究大学 (大変高い研究活動性)	Arts & sciences plus professions (60~70%)	より選抜度が高い	○	独立建物

付録 つづき

	大学名	図書館名 / 部門名	設置	カーネギー分類 ¹			ARL ²	学部学生用図書館の立地 ³
				大学のタイプ	学部教育の専攻のタイプ (リベラルアーツ専攻の割合)	学部教育の選抜度		
18	ハーバード大学 Harvard University	Lamont, Harvard College Library	私	研究大学 (大変高い研究活動性)	Arts & sciences focus (80% 以上)	より選抜度が高い	○	独立建物
19	パデュー大学 Purdue University	John W. Hicks Undergraduate Library	公	研究大学 (大変高い研究活動性)	Professions plus arts & sciences (21~40%)	より選抜度が高い	○	独立建物
20	ハワード大学 Howard University	Undergraduate Library	私	研究大学 (高い研究活動性)	Professions plus arts & sciences (21~40%)	選抜度が高い	○	独立建物
21	ミシガン大学 University of Michigan	Shapiro Undergraduate Library	公	研究大学 (大変高い研究活動性)	Arts & sciences plus professions (60~70%)	より選抜度が高い	○	他の図書館と同じ建物内
22	南カリフォルニア大学 University of Southern California	Thomas and Dorothy Leavey Library	私	研究大学 (大変高い研究活動性)	Balanced arts & sciences/professions (41~59%)	より選抜度が高い	○	独立建物
23	ワシントン大学 University of Washington	Odegaard Undergraduate Library	公	研究大学 (大変高い研究活動性)	Arts & sciences plus professions (60~70%)	より選抜度が高い	○	独立建物

¹ 大学のタイプ・学部教育の専攻のタイプ・学部教育の選抜度は、カーネギー分類を参照した。

The Carnegie Classification of Institutions of Higher Education. <http://classifications.carnegiefoundation.org/>, (accessed 2011-06-05).

² ARLの会員館であるかは、ARLのウェブサイトに掲載されている会員館一覧を参照した。

"Member Libraries". Association of Research Libraries. <http://www.arl.org/arl/membership/members.shtml>, (accessed 2011-06-05).

³ 学部学生用図書館の立地に関しては、各大学のウェブサイトなどを確認し、著者が独自に判断した。

⁴ アリゾナ大学 Undergraduate Services Team は Instructional Services Team に改組されている (2010年8月確認)。

⁵ シカゴ大学の Harper Memorial Library Commons は、2009年8月まで Harper Memorial Library という名称であった。

⁶ ニューヨーク州立大学バッファロー校 Oscar A. Silverman Undergraduate Library は Oscar A. Silverman Library に改組されている (2010年8月確認)。